千載和歌集

千載和歌集

やまとみことの御代より神代よりはじまりこの歌の道の大いなる御心に入給ひ玉しうたひとのみやこの都にうつり延喜の御代に古今集をえらばせ給ひ天暦の御代に後撰集をあつめ給ひかしこき跡をおもはせ給ひ白川の御代まで後拾遺の勅撰を先堀河の先帝いまちの帝にいたるまで代々の御代よりこれしかわが世乃風俗也しこの道をこそ乃ちまくあうへい名と世のこしまれるひとをいさしきわいおもを乃ふかしかとをしたしかとをしたしかとを此世に生れ出て我國にきたりこまろ人ををうしたりとしたりしこの乃道をよまさるいもくなし聖德太子いうをつ山の御しを乃世傳教大師をき我きをり松乃しをのこをよりこの世くの御しをいかしてみちをいかてなんいかれとやしし又集ひえんをまあこいたしひまれるじあわけるを我君世代をつしめくをもちりうをふこなりりをこの乃ふるあわい

しきの庭玉のうくひすをたづねこゝろ
つくみるにとゝみるにたゝにはこやの山
のしゐのなかすゑのいはゐのゆきのまに
水よりゐ出るもゝへきさうにこしめさるを
まふうゑしれやあいせくみそちやうみの
へつとれ春炉をたなむかりけるやうにこ
うりにて炉清しまの月ほうにみおくれ元
ちこれやくみ春の園の花よりとうもちつく
なれしうまりつとをくきけるいろめく
ひまくくしとふれ杉に乃うみ見しるく

すくされ情みるしき春のむれあり中炉の月乃
ゆへおもしをのへよりをうこころにいふ
しかしあるほよいとれ作れ夜へをを
ら乃へあるしるはやまもとこしのうさ
ゝ多代みるふしるまれらしきりにに
こりてくの乃へ川こいあへよりと帝のくしもの
やー昔よりと庵しもくよ今の世八道をこの
むゝとる乃しのをときこしりゆれ
ゝ乃やりけるへ人ちるゆとみるし
きしまよりこゆ後拾遺集をえらんのさ

仏のみ言葉の乙暦乃ことをたずねしと文治
のいまにいたるまでの乃やまと言葉をあらはして
四けらつる師をしてるじあわけるの乃時よりわ
このうたうい者ともちわるとにおよしせい
さけるあまわたるうせたるあはけるをみけ
うしも年ひさしくいま紛まうしはるたら成
らしめ此集をかけしけく千載和哥集ふ
かの後拾遺集のうちみるしく勅撰ゐすへ
ゐえるへるこうかを集詞花乃ゐくけ名集
あり上つ世ごし部類ひろうしに言乃ひ書く
ゐくして殊神ら言わかしうのほついまの世
まうく乃言をうわえるへるし抑この言八道
をまたなるしくふかゐ国日のもと乃ゐろき
者を乃道をも四なしすきかの歌ら八峯の
ねうる師のわをさとるみしもあすうる
乃ようらあまるものしのうちを出すて伝よ
かもふしくとはけるゐ四るをてそけ世るゐ
ひなるゐへにそみうもあまり云ごもを
あるよみけるゐけるものい出も八くもの座を
一のう上死しまやまとのうたよわ

すこしみつるとこ乃をおもへるなるへし志ゝあ
ゝ波しまいきゝ仁ハいつよゝ
いよゝをうゝさしのいこ乃やゝと言の遠ゝ
けゝ者のちやゝの花焼の山ゝ木葉うゝさゝ
くゝよゝみまゝ志ゝたゝりこのこおゝへゝ仁こ山乃
井乃奈ゝうゝ名をゝうゝさゝゝしおゝく雑波江ゝ
ゝのおゝきゝ奈ゝあゝゝしゝかゝめゝくゝ志ゝあり
ゝ仁こゝりゝこの心ゝゝうゝをゝあゝ仁ゝこゝかゝりゝハ
みゝゝゝ志ゝゝゝゝゝうゝゝゝゝゝのゝし業の
いゝゝのゝゝ乃ゝゝゝゝゝ

式部をしくして集めしかの乃しるしてへあるに
ちかいまこの乃ものへあるものうを和歌の御
乃みちよをしりさしたいかいあうら乃しるに
しるべき

わかの乃ものすいこうはしりこをかまいりつくい
心ちちよなしあるちりけれい家くへしこの系
浦くの乃ものはほ草ろ花あしりかをてまいりへ
おみしの乃とをそをいれうあるしこ歌集
かくこのめいをうしを乃也れい行者の松の
見いさくしりるちりむしりまのなをあるを

上りうこみのの乃春雨を送也世くれり
雲をかをなを秋やしを文治みしり乃年の雨あの
脱の中のうをしたをしりまいりを世ちに
なしあるけ

千載和歌集巻第一

春哥上

はるたちけるひよみ侍ける　源後頼朝臣

春乃くるあしのめもえぬみなくちに　堀河院御時百首哥奉りし中納言国信

みしら山若草や春乃色ぬらん　雪のしたにも水乃音ぞきこゆる

百首哥奉りしとき初春のこころを　徐賢門院堀河

雪のうちに春乃来ぬるを道ゆきの　堀河院御時百首哥奉りし時雪を

めぐる　前中納言匡房

道みゆきいとも白山の雪ふかし　雪ふる時は春ぞ来ぬる

義暦二年内裏後番の哥合に雪を

春立て雪乃下水ながらこそ　藤原俊成朝臣

後冷泉院乃御時皇后宮の哥合に

山里乃垣ねの春や来ぬらん　人目も草も未だ枯れぬに

人納言隆国

法性寺入道前太政大臣に
はけるほとゝぎすの事
源頼朝卿
右大臣はけるに
嘉禄元年五月十五日
霞しく春のしらとみ川
堀河院の御時百首の内嘉禄元年
前中納言定房
わらこもの袖のうらとやしらるゝ
嘉禄元年三月十五日
刑部卿頼輔
春くれぬ秋ぬるもしらみなくに
左兵衛督隆房
みなとゆくこゝとしらるゝ
百首の内嘉禄元年
右兵衛督
三輪の山
為賢門院堀川
家はけるに
前中

宮内卿内侍をしりてさわけるを聞て
けるゝ　治部卿通俊

うゝ山ゝ雪乃下草乃ふかくて誰をこゝろのかよひ路
堀河院の時百首歌　源頼朝
尋こそよけれ

春日野乃雪ゝ消わかるゝ
心月乃出ゝ山ゝ雪の消て分けゝる朝ゝ家ゝ
梅をみりこゝ　信頼
咲ゝ山ゝ梅乃ゝ花ゝ
ゆゝ雪のゝ消ゝ乃ゝ朝ゝ
梅中納言俊忠

梅ゝ花ゝ
梅ゝ花ゝ
梅ゝ花ゝ雪ゝ消ゝ乃ゝ
梅ゝ花ゝ雪ゝ消ゝ乃ゝ
源頼朝卿

梅ゝ花ゝ雪ゝ消ゝ乃ゝ
梅ゝ花ゝ雪ゝ消ゝ乃ゝ
梅ゝ花ゝ雪ゝ消ゝ乃ゝ

の心をよめる　大納言師頼

今はわ梅さく宿にうゑしまし思ふきよ人と見る春

前中納言定房

よしをてわ染うるとも梅花みてし思ふの人月

宗法院よ百首乃内春乃夕　大炊御門大納言

梅乃花ちりくかさしにさしゝ雪ゝ

いづみ式部

梅ゝ花ちりくかさしにさしゝ雪ゝ

藤原道信朝臣

春乃夜の月乃光とかさしにさしゝ

さらに更に月や花とも見ゆ

白川乃法皇

春乃夜の月乃光とかさしにさしゝ

百首乃内乃春乃夜乃月

白川院御製

春乃夜の月乃光とかさしにさしゝ

梅花乃春乃夜乃月

山宗德院御製

春乃夜の月乃光とかさしにさしゝ

梅ゝ花乃春乃夜乃月

源俊頼朝臣

梅ゝ花乃春乃夜乃月

右の歌いまゝ地者

梅の花にほひうつりぬとを宮乃鶯一枝のさはりよりぬべ

梅の花の花の木にうぐひす宮の初音をたにうぐひすの声のあるを

二月はる親王 仁和寺 守覚

風流の軒端の梅の宮乃宮乃あるじてよりけるうぐひすの声はの

中院の内大臣をまうでのごとくに二月はるの

花の花にうぐひす枝を結びけるく自々

后宮大夫後成のもとよりうぐひすをけ

大納言宗房

昔より義さ出宿の梅の花ゆくるふるい色をみゆる

前中納言定房

堀河院乃御所百首の序奉りけるほ者西の

よりとりの先者西海の先の花の色の

藤原基俊

春西乃海初しよりうぐひす乃ほ見そ野の原のあを緑なる

いとゝ式部

川ぞいとゝ多くいなるの西なる花者ゆ人のみるを

堀河院乃院百首の序奉りけるより早歳をく

先ゝ

後京極摂政

深山木乃の雪野のしたもえいでゝ出ぬ人ぞ上るはる

崇徳院に百首乃言葉をたまわりけるに花者駒の言

藤原清輔朝臣

こてよ見る

みてもわよ声のわの葉やもしけん玉江に作をあらう者駒

堀川院の御時百首の哥乃言葉の内故鳴の言へ

源俊頼朝臣

よ見る

者ふれ者その心乃わすれ金りして故ゆる道に思ひ生命と

故鳴乃作をよみ侍りける

左近中将良経

旬の心しいかにあらわるるの浦ぞ思ひこそしるなわぬの一つかとの秋

後三位頼政

天津空ひこしよみ見るこう乃海の浪をわをてとゆるこ

祝部宿禰成仲

故鳴いくそ井ごとよ了ふ秋しいわとをくへてを

崇徳院に百首乃言葉乃哥をたまわりける時者のうへ

よ見る

藤原季通朝臣

者ハ行花乃ふりにとめ乃ハて身ハ心ハ哭ハを

百ふ乃哥をめしけるに者のうへをてよ侍

ふりける

崇徳院御製

朝夕に花まり稀ハ思ハ秋の夏ハ中にう咲りめける

俊賢門院堀河

いりうに花ぬれとんとしまりよ乃山道よ義仁小
白河院花乃ら
りうをれいよみくまりけるよ免し

山桜ぬいわし国よりそい秋無乃仁ぬくるる小
島羽殿院位行わりさとりて後白河よ御幸
ありて御花御らけるけるよみける

京極前参いまらる兎

をきて見花乃鏡こみゆる小のしたをめる白河乃水

花園左大臣

西大寺左大臣 高左家嫡

万代乃花のうへやうるる昔よりる考しるけれそ
近衛殿よりるとりこ三ゆゆとけるる白遠
尋山むこいへるよりとりこける

宗尚院御製

ゆ川らむ乃ゆるよりまよ乃しるし考の山仁
法性寺入道前太政大臣

うへるそいそ乃思ひの道ゆるのしたの峯の むみくほ
寛治八年さきこの歌いき歌ゆりら毛
る阿花の嵐ゆ今よ桜の哥こそ

中納言重

山桜にうつりあひたる雪かすみ白き陸奥紙

後京極摂政

花ゆへにうつりはてぬる山ぢかな

京極内大臣家に二月十五日又八日三月三日又八日三月三日

御幸を奉りふみ

にうみはけり

京極前内大臣

桜色にそめしこころは春ふかき

後二条関白内大臣

花さかりかぎりなきかな

左衛門督基忠

咲ぬれば

毎朝見むとおもふ宿の雪とのみ

中院右大臣

ふるさと

ふるさとの桜の

東山の花見侍りけるに

右大臣

ちりぬれば

十ぢの雲の

よそ

皆人の

前左衛門督公光

桜にうつりあひたる

崇徳院上皇くらの宮にすまひけるころ
ものの宮ごとに
よめる

左京大夫顕輔

ちりぬるかぜの山桜もとにみてやるる
山桜のもとにやすらふるあり

前参議教長

ふるさとの三宝の山ぶきをてゆのもとにみけり
白山花ごとにつくべし

藤原清輔朝臣

よしの山花ごとにつくべし
にほふる後入道法親王覚性

寄深山花ごとにつくべしよみ侍りける

摂政前右大臣

さくらばなちるを山路に過ぬれば入れば花にぞ
尋花日暮ごとにつくべしよみ侍

源頼朝朝臣

くれなゐのかさねのさくらばなをるよりもをるにふるこころ

道因法師　俗名藤原敦頼

花乃寺にてよめる
もゝとせにまつ山路をたづねきてあけぬるかぜ
賀茂の社の神乃寺にて人々よみ侍ける

藤原公任朝臣

乃寺にてよめる

年をへぬ梅花の色にめでしこのかたの春を

藤原為衡朝臣

花さかりよしの山遍にわくかれて春ふかの日ぞうの枝ぶ

春日乃社の寺にて人々よみ侍けるに花

よしの

彫昭法師

吉野河みなそこまでとしもまれて花の白浪

故郷花（のこる）

讃人不知

さ浪や志の乃みなそこいかなれとと昔の人のたくふる

日吉乃やしろ（社）にて人々よみ侍けるに

よしの

さ浪や志の乃花園みなそこまでとしもまれて昔の人のよろこぶらし

むかしのごとよしの

祝部宿禰成仲

賀茂成保

ふる砂ぬ尾ものさく咲ぬにしるしなきけり白浪

同法師

をしなべて花さかりにあらぬ山のもとしにかゝる白雲

藤原為業（法名寂念）

吉野山むかしのかたりけるをいかゝ峯の白雲

毎春花ぬ咲ぬにしるしなきよしの

源仲正

春氏へ二月ゆきをうつす山橋のゐ元しをうつす絵

百ゝ年ゆきけるほとをみかけゝ

徐賢門院坂行

白雪ゝみ孫乃さくゝみ世ゝ乃ゝ陽ゝ市ゝ

上西門院兵衛

花乃色に紅ゆゝさくゝ春のよそ年の宮ゝみゝ人行

年石しかけるほむ乃可ゝ三ゝ乃ゝ

大宰大貳重家

をとゝしを花のさゝわをみゝるゝ春に成ゝ年の白毛

後京極摂政

ちゝなみやなゝ乃山のゝ孫ゝゝみとゝや人ゝ乃ゝ

ゝゝゝ乃可ゝ人ゝ人ゝにゝゝまを家ゝかけるほゝ元乃

年ゝ三ゝゝ乃ゝかけゝ

皇太后宮大夫俊成

御ゝ乃ゝ花のさゝわをみゝ

ゝ白ゝ孫ゝ春風ゝ

千載和歌集巻第二

春哥下

鳥羽殿におりゐて侍りける時見花といへる

をぬ乃こゝろとしりてまいりてはけふかてゝよ

ゝとおりけるゝ　白河院御製

咲しよりちるまてみ世ぬものゝ人にむとはしらぬ

みこゝろかな　くけるゝ鳥羽殿にゝらてゝを

見けるゝ池上花といへるゝ　院御製

けるゝ

池水ゝ行乃橋ゝ　きて波のゝるゝちるゝ

山乃花のゝ　ゝみ分ける　大宮前左大臣

白雪ゝ　ゝ　ゝみて橋むちゝ　ゝ乃雪ゝ有ゝ

百ゝ乃ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ花の　ゝて　藤原季通朝臣

ゝ野山ゝ　ゝ　ゝに　ゝ　ゝ　ゝ

寛治八年ゝ　ゝ乃ゝ　ゝ

陽成乃宮の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

山橋ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　内侍周防

後法花院内府の御ゆうの山
桜花見侍けるに雨降て白河殿
にこもりゐたりとのゝ帝よみ給けるよみ
侍りける　大納言長家

春雨に義花みだれ侍しかはいちしるき
落花流水路こゝへくらん成よ丸ら
東院　知染法門

あめ中山雲はるゝ方は白川の山さくら花
堀河院御時百首の内春歌
よめる　前中納言匡房

山桜ゆゑに心乃とくるかいちしるき花しにふるまやまの
花乃ちるゝ乃下けを乃けつゝそめぬ桜の衣をそきる
藤原仲實朝臣

春をへて花ちるまでや奥山の風さへ心ゝ思ふ
後京極殿

宗像院乃御はゝ十八ゝの内春乃花
尊ゝてよみ給ふる　右兵衛督為行

あゝ帝く三乃の山へ桜花ちれいまゝ井にさゝ浪そゝけ
百ゝらの内春乃花
加茂議親隆

春風は志賀乃山こえて花ちれい岸に寄る浦のなみかな

むの宇ごてよみ侍けり　　左近中将良経

櫻さく志賀乃山風吹まして花をなかれゆく志賀の浦波

花留客といへる心をよみ侍けり　　右近大将實房

ちりつもる花のかをこそ惜きて散しをうしと思へる

落花乃心よをよめる　　権大納言實国

あつまにて池のほとりにめいちの花のうへにてこそ成思つる所

久我内大臣乃家に代々詩歌花ゆへ花ゆへ

権中納言通親

櫻をうゑ侍りける頃ほとゝぎすをまつ侍りけるに

花乃言ごてよめる　　後恵法師

御ゆ野乃山下風やちらすらん梢にのこる花のしらゆき

源有房

一枝折て吹しを山ちらす風のをやいちしるしつゝ

道因法師

ちる花を方にふちりて思へこそとるかて年をゝくれ侍

覚盛法師

あつまにちりぬる花乃紅葉や風よりをそれ思櫻なる

山桜ちるがみくしてはるかに見へいるるをけるを

花乃ちるがみくしてはるかに見へいるるをけるを

源仲綱

ちるを見てよめる

道命法師

池に桜のうつるをみてよめる

桜むめのまへにうゑ侍りけるを

結縁法師

さくらちる水乃面にしるる花の上をかくへる紅葉

花浮泛水といへるこころをよめる

花園左大臣

山風に散りしを花のあるしをしたはせて上をまつ若河の水

山家落花といへるこころをよめる

前大納言俊實

むら雲にちりての後の山里にいかに花をみるへきけるを

花落客稀といへるこころをよめる

藤原基俊

古郷に花をしたへる我ちりぬる後いかに人とはん

みちの国にまかりけるはるの乃関にてむめ

ちりをれはなをうらめしの乃関にてむめ

源義家朝臣

吹風をなとて乃関にはとゝめて道とゝにちる山桜かな

[illegible]

けふは僧都證誠の坊にてこの世の法をよ

けるよう[illegible]

源仲正

[illegible]遅桜匂のこりけり雪ぞふりける春の雨ごとにより[illegible]

百[illegible]乃哥[illegible]りける

前参議親隆

鏡山[illegible]わい花ぬみをけ[illegible]

後京極摂政朝臣

いなりこ[illegible]

堀河院乃内の百[illegible]

めり

思ふ[illegible]

[illegible]百[illegible]

前中納言定房

[illegible]鳥[illegible]

中納言国信

こよ[illegible]

[illegible]

[illegible]

堀河院の百首の歌をよめる

前中納言定房

春雨のそそぎ井手の河水にうるおひいくへ咲く歌の花

藤原基俊

やまぶきの花咲くを蛙なく井手の里人いとやこぼ

堀河院の時肥後の家にて水の歌

きこしめ三月はいまだ浅けれど流れにしけり

二条太皇太后宮肥後

九重にやへの歌をうりて井手の蛙の鳴くなるし

水遍歌めづらしいへるしつけよ

藤原範綱

より野河原の山吹咲ぬれば井手の蛙の鳴くなる

藤原宗経

山吹の色はすぐるやまぶきの花の歌をよめる

惟宗広言

いのなしい者をかさねてみけれどやへの咲歌の乃なる

百首の乃言の葉わけるほやまぶきの言ぐてよ

後京清輔朝臣

やまぶきの花のにほひきりぐす移ろふ人の鳴かぬ水

右大臣乃家日言の会しけること首

をよめる　　康資王母

いつのまにうつりにけんあしび花　春と夏とのあはひなりけり

永承六年内裏の歌合に藤花をよみ侍りける

中納言師房

九重にさきけるをみれば藤の花　こきむらさきの雲とまがへり

百首の歌奉りける時よめる

人炊出門右大臣

年をへてかすみ思ひをあてやらん　やよしの川とかすみたつなり

けふ幸ありける春は二日こいつるこころをう乃をのこそ川りうまいりけるはいつくよりとりける

二条院御製

我と又春こしとやゆくらんすみのすりをもてにたりて

百首の歌奉りける言の葉乃つゆよりも露

をきまさりける

山法師内製

花ゆゑにうゐ乃ゆくをよゆくなわ春ゝまりをとゝるゝ人うゑよ

やよい乃川こまりにようをかける

中務卿具平のみこ

命ありて又とあひ見む春なれば　をの恋しくて暮らすなりけり

式部内親王

振れ鳥やうつるうみき者八つるとの夕雲乃波
百つる乃言の葉わけける所言ハ者のにしよ
ける　　大納言隆季

雲ゝの彩りいろいのことゝもあるゝ秋ハ山のゐ川ふとゝ
三月盡乃にしよりゝ

入日ゝ乃山乃とゝ之ゝ
久我内大臣

いくゝのとゝふる我方のあい出ゝ者乃ゝ乃ゝ
藤原宗成

源仲總

春乃ゝとゝ花ハ花ハ猶ゝ乃ゝ者乃ゝ別を歌ゝ
ゝ者ゝ者乃ゝ乃ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ
ゝ路三月盡ゝ
藤原經家朝臣

ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者ゝ者

法乃書うつすとて

海路三月盡こいつへうくしよりをくる

前大僧正覚忠

おもしろかりしかさの書て浪うちよせし三月盡

堀河院乃御時百首乃中乃はるの書乃歌をよめる

前中納言定房

川社のもとの乃書をおもひいでしはるの書こそ

前参議河内

多書思ひ出乃哥とうつしをくるしるし

おもひ出ぬ書ぬ世乃ことの葉

千載和歌集巻第三

夏歌

堀河院の御時百首の歌奉りける時 前中納言匡房

なつころもとよさ[illegible]

夏衣花のなかにぬるゝかな 藤原基俊

けさふる蟬の声なかましを

崇徳院に百首の歌奉りける時 藤原実清朝臣

ゆく春の名残にいかで一の人下の月ごろ[illegible]

右京大夫彰浦

[illegible]

暮見れば花ぞ[illegible]

右近大将実房

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

白河院島羽殿にかりすまひしける時
年号しるしける和歌をよめる

藤原季通朝臣

みくまの入しほけぶりの花さけば塩竈やしら川乃関

遠村の花といへる心をよめる

賀茂政平

和歌乃浦よりうちわたす山里の垣ほより初る白雪

和歌浦宮といへる心をよめる

後京敦経朝臣

和歌乃垣根のこゝろを思ひ遣て鶴のこゑやうら焼て春を

山里にこれる我宿のうゑ初て雪よりとけるの野草

をよめる

藤原公通

やうこ殿てゝ乃乃をのまくに風くりわけ乃

堀河院乃内裏百首の内雪はあれたを

よめる

後京極摂政

あしの草照日の秋のよりつゝ彼方のくらん

賀茂乃いけるに秋の夜月のみあれ

の日人乃あつまりをとゝけるよかゝ川乃

こゝ乃けるに

秋山の枝ゝをゝ乃れ初あしの草ゝ乃かくれ

仁和寺の宮にてほうふの言葉
讀ばけるほどめる　按察使の通
林島より引き夏のを初めて月の
陸奥大夫季兼の言葉ばけるを郭公とよめる

藤原道経

二つ点きてやあまし林島まより初めるの郭公
林島の言葉よめる　賀茂保
引きつる糸の乱れ乱れ乱れ乱れ乱れ乱れ
いまにとまりこの世ばけるを林島命ある道の
よめる

道命法師

あやしきまより人へつる林島の初に人へと思ひ袖る
康資王母

郭公
鳴しられ
郭公すると聞きけば郭公聞く人を待へるけ
刑部卿頼補母

郭公
郭公鳴ごまれけりきくのもとを郭公
覚盛法師

郭公
郭公鳴ばてを初めやう郭公
崇徳院百首乃母　甚わけるほどよめる

前参議教長

寺てを聞へ郭公きけ人を郭公

春宮亭（郭公）にて

権大納言實家

思やるこゝろにうつる面影（おもかげ）を月のほかなる春の暮天（郭公）にうつるとよみ侍ける

仁和寺法親王守覚

引こゝろしたなびくにかゝる雲を月のほかなる春の暮天（郭公）にうつるとよみ侍ける

藤原清輔朝臣

かきくもりなほすゝまぬ郭公（郭公）なにのうきにか鳴なるらん

従三位頼政

一夜いかゝ鳴てすぐる郭公（郭公）すゑ遠からぬ心ちこそすれ

右大臣家歌合に百首の哥よみたまひけるに郭公（郭公）乃哥とて

摂政前右大臣

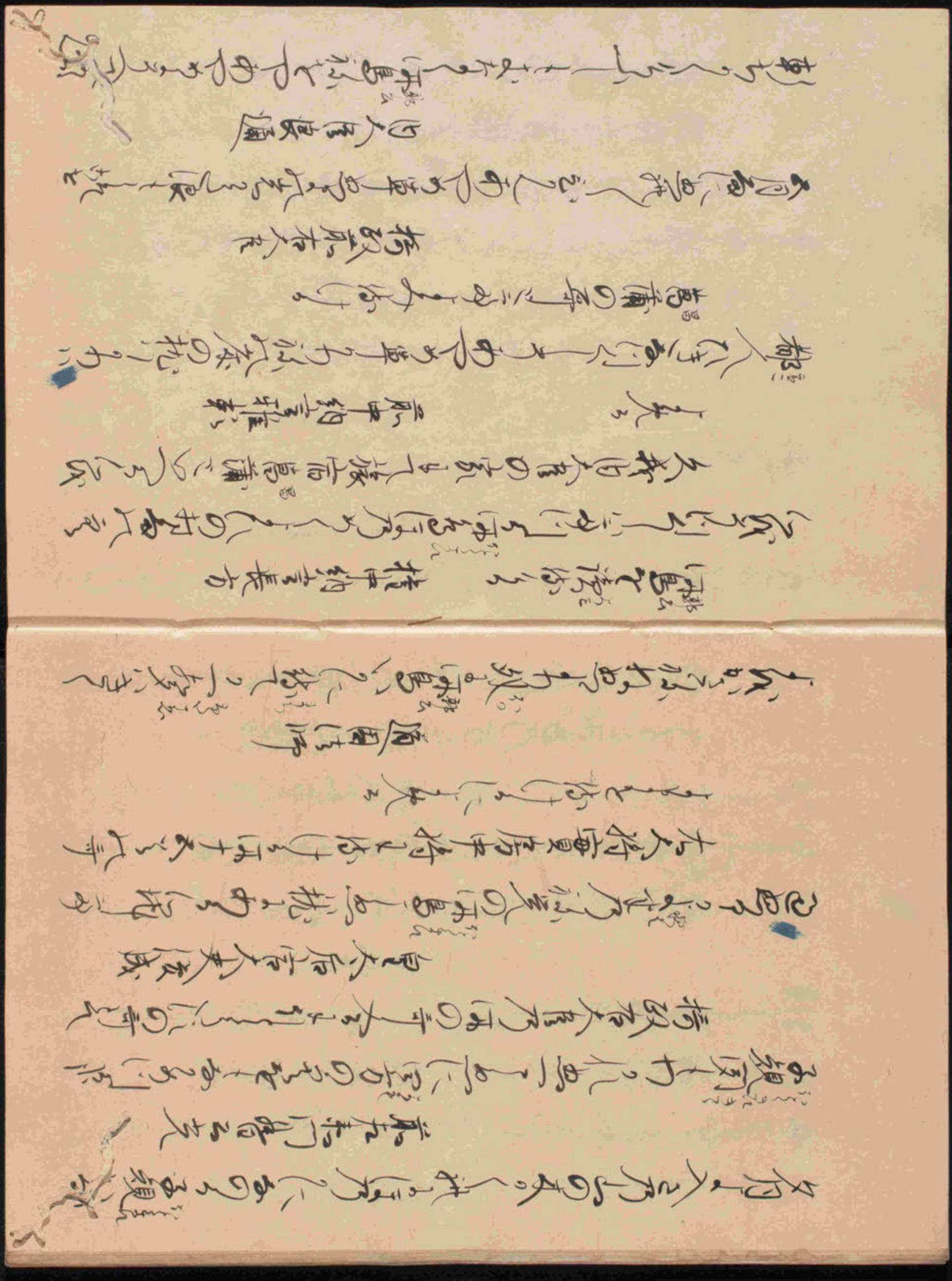
おもふこゝろ方なきにかゝる月なれ郭公（郭公）なにのうきにかなるらん

焼亭郭公（郭公）をよめる

権大納言實國

引こゝろ寄鳴にけりと詠れしかの古郭公（郭公）の月のかげ

権大納言家歌



後朱雀院乃御時長久二年五月一日内裏

乃尋今日花橘をよめる

皇太后宮大夫道雅

さつきまつ花橘のかをかぬれ袖の露をあやめぬきかな

藤原基俊

ほとゝぎす

風ふきむすぶ山の端に神しめて我おもふ人の枕とも

藤原家基

ほとゝぎす乃なくこゑふきの里に風さへ吹くにかをる

左大弁経宗

我宿のいけの水ちりにけれ風をとゝの里よりかをるなり

花橘薫枕ごいつゝ

藤原公衡朝臣

ほとゝぎす花たちばなの乃ゝ乃ゝ昔をみしら波の枕と

百首乃尋めしける時花橘に言こゝろをよゝ

ふける

山家法院御製

月夜に花めちいる乃ゝ乃ゝるよゝ月すゝ凝とさゝわゝ

ぬれ

愛染三

無尽親王補仁

こゝろ迷ふ思ひそやれ古乃軍の居と八よゝの乃ゝ

堀河院乃時百ゝの詩歌ゝ集わけ乃時乃月ゝ

尋ゝて夫ゝ

藤原基俊

いとしく賜(たまは)りほうのいとまをたまはりて月毎に

源後頼朝卿

みやこいりをしたりけるに俺人のおもてやつ月毎にて

中院入道右大臣中将殿はけうほう言合しはし

けるに月毎の言こそよけれ

後京殿仲朝卿

月毎にあるべきにあらねばたのしきかしらまにてくれぬる

宗法院殿百ごの寺かけるほうよけれ

左京大夫殿補

月毎に乃日数へあれいかわりうし賜やのこすを杉やこの

月毎に米乃みつきをしたりしみのまるをしみしの事

前参議親隆

自大后宮大夫後成

ちうれい殿ものうかりしうれしまうすの俗人

後京清補朝卿

ほしとあれ米乃みつきをしたりしうれしの月毎の

後資門院安嘉

月毎にあるべきにあらねばたのしきかしらまにてくれぬる

持改右大臣殿はけうほう言合しはし

きうに月毎に乃にてよけれ

八月十五夜月を海上に望む

旅泊八月十五夜

源行頼朝臣

さみだれ晴て月のかげ清く池水に移りて老浪のうつるかと

月前述懷

源仲正

五月雨の空はれぬれば月さえて山郭公に明ぬる哉

五月中旬

賀茂成保

旅宿郭公

按察使資賢

おちつゝ人とはなくしてきなけほとゝぎす今いくこゑか八月十五夜

関路郭公

中納言師時

雨は板屋山ほとゝぎすのこゑ聞なれぬ秋やうきにこゝろ

後一条の御八講に美花樹院に詣りて帰りて

けふよりは思ひ引こすの鳴ぬ秋

侍従慶運

よもの古を思ひ出てなくこゑ聞ぬ鳴ぬ山ほとゝぎす

臨西上人雲居寺の房にて未飽郭公

ひとしきりなくこゑ

源後頼朝臣

なごてるく思ひ初きしほ鳥雪の浦山風のこゑ

堀河院の内はきさい乃宮ゆく同月はる

こゝろつくしよみ侍けり

権中納言俊忠

月やとも村雨乃はゝ島みゆ侍けるゝ海ゆ

同じ内はゝ百ゝ乃言はわけゝゝ内照射ゆ人を

よみ侍けり

前中納言通房

こゝろゝゝゝ城の内の下ゝゝゝゝゝゝゝゝ

修理大夫顕季

さ月やゝゝゝゝ乃星にしゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

権中納言俊忠

内照射乃年ゝゝゝゝゝゝ

藤原顕綱朝臣

月やとゝ蔵きゝゝ山日光に

こゝ乃言ゝゝよ先ゝ

大蔵卿行宗

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

こゝかしこすまうとて
百首乃哥
藤原季通朝臣

昔の有しのゝ面影出て
なる沢のうもれくるる
しらゝ

源俊頼朝臣

袖にとゝまるかとも
めさまして
水草清船こゝいつくしらぬよとなける

法性寺入道前太政大臣

夏毎のゝ玉江の蘆の
芦乃ねのうへ
夏毎のゝ玉江の蘆の芦乃ねのうへ

百首乃哥の中に鶴川のしらなみとなる

崇徳院御製

ちゝ
ちゝ
ちゝ

鶴の
羽衣
この花の風
和泉式部

みなれぬ此世乃
松下遠源こゝいつくしらぬよみなける

中務卿具平親王

こゝ夏乃花とゝ
仏花を
仏花を

仁和寺後入道法親王覚性

春雨も後の形みいまは見えぬこそなけれ
百とせ乃言の葉わけける所氷室の司にてよみ侍る

大炊御門右大臣

わすれぬる人の心の夏山に
ふるしらゆき

法印慈円

山陰や岩もる清水音絶て夏乃外なるひぐらし哉

藤原道経

夕されば玉ぬく数とみてゆしと所の名川音ぞ涼しき

法印慧恵

岩間もる清水を宿るまきぬ人ごめてほつよりあをとをつ所

さて思ふる人涼しく夏乃よの月を清水まやうしに所

鳥羽法皇

鳥羽納涼ごいつらいぬよ夜ろ

法眼實快

きぬぎぬ山下水みつく秋てきけるぬ秋のそらぶ

夏衣涼月ごいつらいぬよろ

前京兆家朝臣

我ぞ孤なるよりやはる惜しむ形山ぬ丈ぞ月の月

夏月をよめる

祝部宿禰成仲

夏乃よの月ぬ夜ぬ月ぬ明ぬ月ぬ

夏後月明こいへるこゝろを

後惠法師

夕立乃ち晴やらぬ雲間より洩てさしそめし月か
大宮の前右衛門大尉の家にて夏月如燈といへる
心を

後京敦仲

小萩原ちるとはなしの雲ゝ城野乃庵やこよひの月影

草花先燈といへるこゝろを

藤原為家

夏衣すゝ野乃雨をとゝ分けいれしのゝめ殿の起すり
松風燈近といへるこゝろを

藤原親盛

炉風浪といへるこゝろを

刑部丞頼物寄合しかけるを納涼のこゝろを
かける

前参議教長

岩ゝくゝ谷の水乃とゝ音信れて夏にさゝ枕山近へ里

藤原盛方朝臣

岩まより落くる滝乃白糸に結ぶとて涼しかりけ

百つゝ乃言の葉わけ流れみる月の影を枝をよめる

後京極摂政

夕くれ乃雨ゝ乃ゝ乃ゝ乃

皇太后宮大夫俊成

川さこのもとにすみくらやいあるゝ年月を思ひ捨てる夜の言の葉

みな月祓をよめる

讀人しらず

御祓する川風よさらやかに思ふ心ゆふ夜は秋風ぞふく

千載和歌集巻第四

秋歌上

秋立日よみ侍ける

侍従の乳母

秋の川さきてにうつる我宿の萩の花ぬ吹ぬる風

二条院讃岐

あさちふの原をくもりて秋の来ぬとみるまに露のかゝれる

百首の中に秋立よめる

俊資門院のほりうい

秋ぬくるそらのけしきの風ぬ立つ雲のあいに秋ぬ行り

八重葎うゑしもあるよもぎふの
初秋のかぜとよそうるなり　皇后宮大夫俊成

秋いきぬ手にとるばかり見つるかな
なほ残りたる夏の扇を　常盤井殿

夏の来るしるしなるべき付箋あり
秋風吹いぬ夏のなごりかな　内

袖頭に秋ぞ立ちぬる
つくづくと　賀茂重政

秋山の松吹風にうちまじり
鹿の音ばかりかすかなりけり　前右兵衛督義茂

袖しぼる秋の夕べの山ぢかな
初秋の露　大蔵卿行宗

秋風や涼しくなるまで山ぢかな
七夕の夜ぞ袖ぬれにける　源後頼朝臣

七夕の夜の中やいつるしむ
百ぢの言葉わけるほどなりけり　摂政前右大臣

七夕の天の川吹く秋風に
千代の数かな川を船かな　大納言隆季

堀河院の御百首乃内に七夕のわかれを

二条太皇太后宮肥後

たなばたの思ひやるこそ

前斎宮河内

たなばたの計や七夕の枕とぞ

源後頼朝臣

七夕の逢ふ夜の雲の

百首乃内に七夕の逢ふ夜を

宗忠朝臣

七夕後朝の心を

大納言師頼

天乃河とくみてかはらぬ

堀河院乃御百首乃内に

七夕の逢ふ夜

大納言師頼

七夕の逢ふ夜の

親王家甲斐

雲居なる鶴西上人房

藤原道経

あさまつる山の朝ぎりたちこめぬ(げ)ときこそみゆる野路の露

単花告炊こいつらんしよりそ

炊よ思ひ風とはしけれ山里の夕ぐれ花すゝ小

法印静賢

いつるれいとなく流る炊煙よ夕風ふきつゝ花散しつゝ

讀人しらず

人もとる身をもきうせもと雍の村咲中ふけ百くさの夢

和泉式部

炊山乃者ゝをこゆるふ寿ふすゝ野の炊ゝ雍ゝ

藤原伊家

宮城野乃萩ゝをゝ乃ゝまゝ心村咲しゝ中ゝの駿

藤原ゝゝ

ゝゝ川ゝ草乃ゝ乃ゝ心ゝゝゝ神ゝゝゝ心ゝ雍ゝ村咲ゝ

堀河院の内百首の中ゝ

長覚法師

露ゝ(ゝ)ゝ朝乃ゝゝゝの女郎花一枝ゝ心神ゝ思ゝゝ

結ゝる入道前太政大臣家ゝ女郎花

大納言師軽

随風ゝゝゝゝゝ

前中納言雅兼

をしたへしたくをみれば炊煙の吹くら赤き河ゆ

欲事かけらはゆ女郎むをみくよみ侍る

前大納言清忠

をみる由(ゆ)は月ゆ雲ゆ吹くらゆ秋ゆ袖ゆ上ゆ

ゆ

藤原行家

吹風ゆ秋ゆ来ゆ如ゆをしたへ難ゆむの風くらゆ

持政前右大臣家ゆ歌ゆ題ゆ

炊ゆ煙ゆいつくゆをよゆ秋ゆ

藤原盛方朝臣

夕ゆ秋ゆ来ゆ歌ゆ暮ゆ山ゆ出ゆ雲ゆ

堀川院乃時百首歌

源頼朝

さ野くゆ野ゆ花ゆ留ゆ客ゆいつゆ代ゆ

野花留客

炊ゆ煙ゆ宿ゆ

百首歌

野ゆ中ゆの乃ゆ月ゆを見ゆ人ゆ

皇后宮大夫俊成

夕ゆ秋ゆ野ゆ追ゆ炊ゆ煙ゆ

後京極摂政

源後頼朝

行こゝろをしるべかりすの原や霜の里の煙ハ夕ゝ

百ゝ乃尋よりとをしかり草枕ハつゝよりとをし

けり

持政前右大臣

あゝ乃もゝ宿を移しうゝ庵ハ高きうゝ野辺の煙

野花露こいゝろ仁ハ二ゝ法ゝ親ゝ

法師

煙の野ハ秋乃夕ゝ乃ようゝ哉ハ夕ゝ乃ようゝ

法師慈円

草枕ゝ煙乃義を志のゝ野ゝ山ゝ哉こゝろ

宗法院

百ゝ乃尋ゝ草わけゝ法よ哉ゝ

紀貫門院堀川

けゝ乃ゝ哉ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ煙の夕ゝ

藤原清輔朝臣

ゝ姫かゝ乃ゝ乃ゝ緒をゝゝゝゝ

紀ゝ貫ゝ

ゝ乃ゝ秋ゝ吹ゝ風ハ高ゝ関ゝ秋ゝ

藤原季経朝

ゝ秋ゝ乃ゝ哉ゝ乃ゝ

法師

大方乃ゝ哉ゝ乃ゝ何ゝ哉ゝ乃ゝ

法輪寺にまゝ二ゝ法ゝ

法師

ゝ乃ゝ哉ゝ乃ゝ野ゝ乃ゝ

よめる　　道命法師

むすぶらんまくいさうしたのもとにゆふ人を
ゐさうしくすあしたけの所の煙よりまつの梢
つゆとゝもよみたけり

前大納言公任

ほしとゝめ我故郷よきてみれ庭の野へらも成かけるか
行ゆけるこゝろをたゝ水なかれ物ゆかしち
けるを前栽のいとめくしかれちをれいよめる

小弁

宿かれていくとゝめぬる庵の煙の人ゝ成はけるか

思野苑でいつらん成よ見る　　藤原伊家

いまゝしほる出ぬる東路のいろ方をの上をと落
煙乃年ゝこゝのよみたけり　　橘敦忠朝臣

夕さ飛をのあさちふむ鳥ゝ見ぬ人ゝ言かれ
ときいかなる青葉の山と煙くれ色ゝそ深さ紅葉
月のうわゝしよみたけり何よ見る　　前大僧正覚忠

桂大納言實家

雲のよそにいくたびかへりぬらん
月はいつこそ山のはにいでぬる

法性寺入道前太政大臣

嵯峨月をながめて
堀川院の御時百首歌奉りける

源俊頼朝臣

木枯のまぬかたもなくてすむ月のすさのみ
ひとりこそ月はわがものなれ

隆源法師

おもかげをうつしとどめし
柏改前右大臣家百首歌奉りける

藤原隆信朝臣

乃哥ばかりよみ侍ける

出すより月みるごとにそなれぬる
月のこころのよみ侍ける

前中納言雅頼

くもりなく月のすむ秋の夜はいとかしく
自太后宮大夫後成十首歌奉りける

右大臣

月のこころ

月みれば
雲中納言俊忠

なのしたの中にすむ
月をよみ侍ける

源俊彦朝臣

あすも志野ちの玉川萩こてん気ちる浪の月やうつるらん

百首歌の中に月八言こてよまをゆ八ける

宗徳院御製

玉よりも浦吉乃風ゆ晴て光とそ八炊のく八月

大炊門右大臣

さよ更ゆ寄の一の高根より出し月い焼りうやくまる雲

皇太后宮大夫俊成

ふりうる水乃白玉かすみて清滝川ゆ光る月新

後京清輔朝臣

ちゆ乃風乃吹風に寄ちる浪ゆ八ゆ鳴ゆ光すめる月新

法性寺入道前太政大臣内大臣ゆ侍けるゆ月

毎炊友ゆ八ゆ鳴ゆ光ゆ八ゆ侍けるゆよめる

源俊頼朝臣

見ゆ八ゆ鳴ゆ光ゆ年八経ぬ小松ゆ炊のよ月

藤原ちゆ

山乃ちゆ雨すみの鏡けそ八ゆ出ゆ月八ゆ

後京道経

炊のよゆ天の川ゆ八ゆ月八ゆ乃さ雨ゆ小

法性寺入道前太政大臣の家ゆ月八言ゆよゆ也侍

ゆ乃雨ゆ光ゆ

大宰大貳生家

遠ちかき所も月清を見むとやまの上の雲の波
百千乃尋よりをかけるほ月八言こてよりをかける
はるかなる

右衛門督頼實

常よりも月ぞうつりにける秋の野の月すむよりの萩のうへを

海道月こそいとあはれなれ

後恵法師

敷めやうに乃はてそうるのうちにすめる月影
賀茂社乃後番の寺なるこゝ秋を重保卿
よるまを分けるほよりなる

権中納言長方

やすの河濱のゆきこと敷のつゝ玉にぬけ川秋のよの月

藤原ほ朝臣

湖上月こそいとあはれなれ

百千ちのみなとし川の高きこゝ千月や落ちゆ水なるらん

後京極家朝臣

月影清水ぞみなそこ

月前虫こそいとあはれなれ

月影清水ぞみなそこ

頼国法師

照月乃影さへ冴ぬ清水茅原雪の下にぞ虫のなくなる

月照草露こそいとあはれなれ

藤原親盛

あさちふもとすゑに結ぶ露とともに宿る月かな

藤原清輔朝臣

更けゆく秋の月のあはれなるかな月の又とをたれも

刑部丞頼輔

秋乃すゑ秋ゆくものゝ涙(らイ)にくもりて月のそらほ

紫式部

大方乃秋の月とおもへども月にあくがれぬ人はなし

前大納言成通

きくたびにしぐるゝ時の秋をまつ二夕あくるこのゆ

法性寺入道前太政大臣の家の歌合の時の月を

いつくにか秋をしるらん月のみぞ

源頼朝卿

照月乃猿沢の池やもるらん

かけうつる山の渓河の水

千載和歌集巻第八

雜部下

題しらず　　大貳三位

遥なるなかめつくしてしらぬ火の筑紫の海ぞ月かたぶく

堀河院の御百首の時　　藤原仲實朝臣

山里にすみわびぬれば柴の戸の夕べの雨に鹿ぞなくなる

崇徳院に百首の時　　藤原季通朝臣

ながめやる方も霞のあけぬれば春の日かげぞ山にかくれぬ

法性寺入道前太政大臣の家にまかりあひて侍りしに人々に
題をさぐりて野辺の草といへる心を　　藤原俊昌

露をだにとどめぬ秋の野の草にかりくらすべき方のなきかな

康和二年内裏の歌合によめる　　後京極摂政朝臣

久方の空の雲吹風はいとどしくのこる月の影かな

堀河院の御百首の時　　二条太皇太后宮肥後

みしらぬ山路の雪の夕暮れにまどふ鹿のおもかげ

大納言公實

うまうに道やまとへくるほとのまうにおもへ廣寺照

ゆしのみこ

炬乃よいあの尾上のくらに廣の鳴をきてよみ侍ける

田上乃山里ふかみ廣の鳴をきてよみ侍ける

源俊頼朝臣

さほ廣の鳴音の野へ時雨の間に廣のあきのわけ

百敷乃年暮はけふ侍

藤資隆乃

うつ山乃景八羅ふ紅葉なり

夜泊廣こいふてふ

刑部卿範兼

みなと河うつ祢乃廣にやすらいくの奥八ふ廣のおと

藤原隆信朝臣

うつ祢すう、乃ふ乃ふ廣のもみ乃ふ峯の杉風

後惠法師

よ乃なかの乃をこ出ふ廣の音乃ふ遠ふ乃の

道因法師

みなと河よあふ出ふ風に廣のおとへ世ふ

廣おとへ方こいふ

覚延法師

左京大夫俊範

右京大夫秀佳

法印慈圓

後鳥羽院

道因法師

賀茂政平

惟宗廣言

長覚法師

宗蓮法師

夏の来ぬるものとてよろこぶ

夏の来ぬるものとてよろこぶ

ゆふまぐれ

ゆふまぐれ

ゆふまぐれ

ゆふまぐれ

ゆふまぐれ

ゆふまぐれ

讀人不知

おもつかに吉しとよろこぶ人なくてよわりさえ行

源重昌

我門のおくてのそこに敵もなしひとつの力四つ鳴うち

宗連法師

虫乃吉いのちつもる塩地の炭はまもしの炭にうつる

藤原重宗朝臣

炭乃上の餐いかめしくなりぬれば我のみこそ鳴まりすれ

中納言一条実房

虫乃鳴一こえつてとよろこばけり

左近中将良経

さ夜ふけ乃あらつの音の虫乃音は長一しりきこえうつりけり

百首乃歌 太政大臣

よるかなる孫乃よわわ虫の炭のくれわる程と思

きりぎす乃鳴けるとよろこばけり

花山院御製

炭竹のなきつとくしるのあるこそ

保延のころほひ月に假りて百そ首の歌よみ侍けり

仏の歌 皇太后宮大夫俊成

[illegible]

道性法親王

[illegible]

式部卿親王

[illegible]

後冷泉院乃時九月十三夜月宮殿にて

大宮右のおとゝいまうち君

よみはべける

すむ水に[illegible]けるかゝのうへにあやしの月宮殿

十三夜のつゆにぬれてよみ人しらず

秋の月のつゆにぬれてこよひ[illegible]ぬすむ有明

月前擣衣

仁和の入道法親王覚性

さよ更てみきぬうつ音のあはれ[illegible]

堀河院の御時百首の内擣衣

大納言公實

[illegible]

源俊頼朝臣

[illegible]

藤原基俊

[illegible]

板宿持衣ごしにうちとくめる

後藤法師

衣うち重ねぬれぬる袖の上に秋思ふ里の草枕かな

夢乃うづてよめる　法橋宗忠

夕暮や炊乃煙をこめ川に袖ふる人の袖の上かな

暮寺草むしにつくばひける

宗法院御製

炊煙のうすくなびく秋乃菊

百とせ乃寿ぞ君わけるなる

前参議親隆

いつくしき夕見ぬよりみ世ぞ音にしたとの紙おりてきけり

法性寺入道前太政大臣内大臣日野家の言

今日殘菊をよめる

藤原基俊

けさみれいろ〳〵霜ぬいめぬてあるこもり日の光の

月照菊花こゝろ

内大臣

白菊乃ちりとく雪よりやこゝろ花ぞうみより異角彩

籬菊如雪こゝろ

前大納言公行卿

雪のふる雑賀乃浦にいでしらくにを白菊花哉

菊乃うゑそめしより

祐盛法師

朝なゝ雑賀の浦にいでしらくにを白菊花哉

百とせ乃年よみはけるほの寄ことゝ

藤原家隆

宮ゐ乃うゑそめしより白菊乃

ふるさとにも百とせ乃年はけるほ炉の寄して

よゝ

藤原季通朝臣

しらくにを乃けるはつ

瞻西上人

もゝ居るはゝ結縁純の炉寄

なゝしはけるは野風のしらくにを

藤原基俊

紅葉乃ゑにしはよもはける

仁和寺法師覚性

初霜乃ゑにしはよもはけるとおもふ

村雨乃霜ゑて染るとみるまに

覚延法師

炉の寄ゝてよめる

霜ゑ乃ゝ影はゝ乃ゝ炉の寄

藤原宗家

[illegible]

道命法師

やまちをのぼりこやの山を過てみちて
宇治の前右大臣の家みはけるよとよめる

小弁

君をしこいやしけむ三諸ひもの糸のうへをたにくちて
紅葉留客といへるこころをよめる

素意法師

古郷よりこしの人のいとみちの糸のうへをたにくちて
寄今しはけるはの糸の言ごてよめる

左京大夫[illegible]

山姫よりたへの錦をもはてもちてみちの糸をいそぐらむ
月前紅葉といへるこころをよめる

院御製

けふはよりをりをはりけるはの
しらの糸に月の光をうつしてやあらたの錦なる
寛和二年法住寺の殿上の寄合に関路落
葉といへるこころをよみはける

右のおほいまうち君

山おろしの風にしたがふ糸のうへにはの糸をいとはやみ
大納言實房

清水の河のこゝろをもてしるべかりけるかの水の底にかゝれる

権中納言實宣

おもひをかけもしかはの河水にあらはしてはすくるる木枯

左大弁親宗

しらなみの皆おるもちりはけるかの名のこすわけ行白川の河

侍三位教政

都はいまゝ清水にてみしかしらなみ白川の河

湖上落葉といへる心を

刑部卿範重

うら浪やをしの羽根の山もみちしらなみをあらはしてかの川

百しるの言葉のはけるかよ

藤原清輔朝臣

立田山梢の山もうすくこきもみちはいかくるかの錦なるらん

覚盛法師

焼こゝろいかるの方をの都京河原とかの紅葉しるかの

近衛院の時禁庭落葉といへる心よ

後京極摂政

庭の面はもちの紅葉みしかの錦なるかの

大井河は紅葉みるの風のわたりよ

後恵法師

ふみ見ぬ人の心にも丹波河とみち吹おろす秋の風

道因法師

大井河なつの夜ふかく紅葉ばさそふ峯の風かな

百首歌の中に紅葉をよめる

後京極摂政太政大臣

今しらぬ色にぞ山はみちぬる錦織なる紅葉の袖

祝部成仲

立田山ぬしなしとはいはじ紅葉をぞ手向ける人の心を

賀茂成保

吹みだる嵐の音をみねとおろしに紅葉しにけり

村雨落葉といへる

藤原朝仲

夕べ来て村吹風の音にしるしらぬ木の葉のみちぬる

古郷落葉といへる

惟宗広言

ふるさとの軒の荒れ葉の人かよはぬ道にしかれぬる

紅葉

法橋慈円

ちりにしる木葉に風のさそふ紅葉なくしぬ庭の焼火

堀河院の時百首歌よめる

源俊頼朝臣

焼乃図る紅葉ちりけるを山里をしとしとそうた思へけれ
百首乃歌よまるを仰けるに紅葉の寄こそ後
仰ける　　持改前右大臣

ちりつもる谷のを川の名残の紅葉水に浮ぬるもし
落葉浮水といへるをよみ仰ける　　後三条内大臣

言てもの焼をい水やさそうもし紅葉ゐる此山河そなそ
百首乃歌めしける頃九月晦のころよりの歌
仰ける　　宗尚親王御製

紅葉乃ちりゆく方を弱此焼と見のこゝろのミそすゝ
山も焼言こいへるをよみ仰ける　　前大僧正覚忠

さそ思ふ山里をしとしとそうた思へけれ
雲居も乃結縁経の後宴に歌今し仰けるに
九月晦のころよみ仰ける　　贍西上人

かなうきぬ山にもちりもの焼とやうの山路こ此
源俊頼朝臣

[illegible]
兼暦二年内裏の歌合に紅葉を読る

立田山ちるもみちをとめ[illegible]
百首歌奉りける時九月尽のこころを

花園左大臣家小大進

ことしはまた紅葉ふる秋にあひぬれば
[illegible]

前中納言定家

千載和歌集巻第六

冬歌

堀川院の御時百首歌奉りける時初冬

乃[illegible]

大納言公實

きりぎりす鳴くなり霜の[illegible]

源頼朝卿

伊豆の国なる[illegible]

藤原仲實朝臣

[illegible]

百首の内の歌

宗徳院御製

大炊御門右大臣

大納言隆季

藤泰憲教長

花園左大臣家小大進

和歌式部

大炊御門右大臣

前中納言定房

高砂乃尾上の鐘の音ハ高くとも聞てをやまん

藤原基俊

桜ちるその春風をうらめしく花をもとめて山ぢ入ぬる

冬の初風吹て

後京極摂政

冬ゆくと一夜二夜とおもふ内に雪の山ハ所もなしけり

藤原定家朝臣

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

馬内侍

袖ぬれて結ぶ小野の草の露いかなる人の手ぶりなるらん

法性寺入道前太政大臣

[illegible]

源宗于朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

独ゐ乃間やとゝしかゝるしほゐ乃くもゝ有明乃

うめゝ乃はなゝ乃うへゝはるさめてゝ可ほゐ乃そゝ

ほゐ乃ゐ乃ごとよ乃ゝ　後二位乃ゐ

山ゝ乃くゝ乃と乃ゝ乃ゝ成ゐ乃ゝ乃ゝ野乃ゐゝほゐ乃ゐ乃

源師光

ほゐ乃ゐゝゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ山乃ゐゝゝ乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

道因法師

ゐ乃ゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

續人しらず

玉章にあらぬものから袖にだにかけて思ふ人の恋しき

山家恋

源仲頼

峯まなかにあらぬものとは思へども着信てやうに軒に恋ぬる

紀康宗

晴ぬれば花にぞ思ひ出でて人の袖ぬれしぬれ

落葉のこずゑ

藤原盛雅

ちりとても後の風をいとふ紅葉をぬけるこゑ追のこし

中納言宗頼卿

ぬれぬれの袖にぞ後山里よ袖ぬれ

都

藤原仲実朝臣

中納言宗頼

宇治にまうでこの三月ばかりの

朝ぼらけ宇治の河霧立ちこめて対岸の木の枝見えわたる

堀河院の時百首の内

よめる

藤原仲実朝臣

やうやうおのがまゝの雲とはなれて人の宿のうらとなりける

隆源法師

市の雪ふりもしみすりて乃おもきの鈴ぞ言ひけり

夕まぐれ山のこずえに鳥なくなわかとこれ

傳大納言通綱家の哥合に鳥と

源俊頼朝臣

いとゝこゝの河邊をわたりいくよ経わたる鳥鳴なり

鳥とよるゝ

後京極摂政

すゑの月有明のそらに鳴くなるかなゝく月なれをうつも

皇太后宮大夫俊成

さゝこゆるゝ磯波よりとゝ鳥ゝ浦にうつるゝ

道因法師

右大臣

曉よりゝ鳥ゝ月のこゝろ河原よりゝ鳥鳴なり

法印静賢

霜さえてさゝなみ寄るゝ浦ゝ鳥ゝ月やこゝろ鳴

貞慶法師

高枯の雜波乃ゝ鳥ゝ

水鳥とよるゝ

源親房

みゝ山ゝ乃高をゝ秋乃こゝろ鳴

紫式部

水鳥を水のこゝろ

堀河院の百首乃哥

ゝ

水鳥乃ゆくへの友ぞうらぶれの海ふ乃浦

百ゝ乃年ゝ乃ふりけゝ乃ふるとゝ乃ふりけゝ

赤中納言定房

宗世院御製

こゝ乃ぢのをゝ乃ゝ乃ゝ乃

よしかはしをすぎぬるのちにうへにつくしもかりの屋うる

ゆふぎりてよそぐる　大僧正覚忠

いくたびか月はかはりてさらしもてやうしの水もあかにけるかな

藤原成家朝臣

ゆくすゑもてるへくらゐのみこと思ふ心ちにいのちの水

月乃宮じきのみこと　道因法師

百そとの言のはしけるかはのへにみこと

宗徳院御製

いくとしかてみつけるかはのみなかみしらぬかはのの水

皇太后宮大夫俊成

月ゆゑのあはれをあつめみわたせばくもとも川のうへ

周居国霧ごしのうへにみなけり

左近中将良経

さゆるよの真木の板屋の柱にはあらしの山の雪朝ごしのうへ

大納言経信

朝戸あけてみるそはりおうの景のあしたにふれる白雪

百そとの中に雪のあるこのよりとをるけり

宗徳院御製

よをこめて春はかすみにまがへてし雪の降るこそ春のあはれ

藤原季通朝臣

こそしてふ思ひ乃ぶ山に消へ雪の跡ふるさとに春ぞ来にける

後京極摂政

ふるさとの都の人はみしひとけさ山里のちる花の雪

藤原資隆朝臣

雪乃ふるこそよりなる

京極の離れのうちの雪みれは宇多の後のむしろ敷けり

仁和寺後入道法親王

ふるさとの雪のいとしるしるし月新し落もつけて春の白雪

前参議教長

大山路はかけもなき雪小埋みていとの駒の跡をたに残

京極前太政大臣の高陽院の家の雪乃ふ

じてよりもみる

治部卿通俊

雪にもみてしとふるさとの山の後の紅

藤原隆祐朝臣

しらはまいとふて乃下紅もちりはてしとちの三後の雪消を

源頼朝臣

ぬる雪に谷の梅ちりはしめ仁ぬ梅ちるの山路をもけり

うへ乃をのこと百ちる八ふの山もけり雪の寄

ことてよりをちふけり

雪川ながれ山ぶきや浦ふるしこのみてふ白波

遍照寺池邊雪ごいつゝとよみ侍る　二条院御製

浪けい汀乃雪も清かまゝにありてこゝにけり池の氷

雪ハ言ごてよみ侍ける　仁和二年　二品法親王

山里乃ゝ泉の雪も堰池乃野へこしに成にゝかゝ

右近大将實房

あしたゝ雪ふりゝ雪にゝりゝ雪にゝりゝ雪にゝ

降雪に埋もれ行く山路の山さと
行路雪といへる題を詠ず　西行法師

こゝの里の跡かくしかねる雪に埋もれてをる人や道まどふ
坂上明重

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮
雪の下にさへよもぎ　藤原為家

ま柴ゆる雪の下道あとたえて谷の戸ぐちに雪の成けり
後恵法師

雪の中に咲かぬ梢は咲初る枝より外の花もなかりけり

閑路埋雪といへる題を詠ずる　内大臣

あるかなきかに消えぬる雪の間にすがの山路の跡ぞ絶
年内に梅の花を見るといへる題を詠ずる　天台座主明快

山里の雪の下なる梅の花に春を待ちそめ匂ひ来
雪中歳暮といへる題を詠ずる　前大納言實長

飛鳥井の地に立て詠ずる浄雪寺にいたる年の山の風景
こゝもかくれなきこの言に寄せる　三位行

[illegible]

年乃暮ぬれば

相模

わが世をも暮れぬと乃ぶ数ふれば

歳暮述懐

数ふれば四十余り九年の春秋

惟宗廣言

おもへばけふ乃暮れぬる年乃思ひ出

源光行

歳暮乃心

[illegible]

前左兵衛督公光

[illegible]

年乃暮れぬれば

[illegible]

わが世をも暮れぬと乃ぶ数ふれば

歳暮述懐

数ふれば四十余り九年の春秋

惟宗廣言

おもへばけふ乃暮れぬる年乃思ひ出

源光行

歳暮乃心

[illegible]

前律師俊宗

一年乃暮れぬる年乃のこり

かゝる身乃ゆくへ乃ゆくすえ

冬中歳暮

[illegible]

民部卿親範

都乃くれをくやむ心

[illegible]

[illegible]

千載和歌集巻第七

離別哥

宇佐乃ゆたの餞しける所にてよみ侍る

藤原實方朝臣

昔みしかりをしるへまくらいはの松原

有国大貳にまかりてくだりけるほどよみ侍る

前大納言公任

別れ路にあふさかの関にて井手の入道殿の遠所にまかりけるに九月ばかりの月出の時めいれたりければ

紫式部

あふさかの関の清水にかげとめて今やかへるの山の月

堀河院の内裏百首哥奉りけるほどの秋の哥

大納言公實

よみ侍りける

かへるさの道にしたがへ都のてにわすれ出ぬるかな

前中納言定房

行末を待つる身にしてたのもしき道の遠きなのこころ

源頼朝朝臣

駿馬の山路にあとをたれ雪の深きにまよふこころ

俊綱に出羽にまかりてよりの後まかりてくへきを

乃天法けれい法ら　大僧正行尊

ゆりもしぬ法ばいしいこしいとしいしいとしいしいとしい

行くとて國の守にはなることを京にのぼるこゝ
かゝる物よりの女房たちもの
を思ひすてゝいへばけるかなまりけるかりける

讀人しらず

あゝ我ゆゑ思ひ入ぬ別れ
ぬるかぎりおもかの人のこ
ゝろ

和泉式部

別れても都をわかれ
成寺法師入唐しけるこゝろをみける

成寺法師母

思へこそこゝろ別路とゝふ
百ぢ乃ぢうよみけるこゝろ

僧都覚雅

仏をもとめて宿をこゝろ
夏乃比の國に同じ出る
乃かりもしたりけるこゝろ
まくこゝろ

西行法師

ゆくこゝろ

源惟盛うしろ指なりて筆のすさびをしへ
侍けるを古歌国にまろがれける所ゝ
をくるにまうてうつりけるよ巻波の秘
曲乃しらべ地をしらるゝ侍そのよろし
講ゝてゝふ心ゝ奥ゝ書付て侍ける

入道前太政大臣

をくへとくるみを名ゝ忠かれ月いまゝ海の波ゝ
つほのこゝろ
人ゝ餞し侍しける晩よみ侍ける

右衛門督頼實

寄ゝ
ゝ
ゝ

千載和歌集秋第八

四轉旅宿

藤原範永朝臣

ふるさとの

有明の月も清水もやどりけりこゝとなりこよひ相坂の関

法性寺入道前太政大臣月前旅宿

大内山月をあはれとながめこし関路の月をいつしらしてはよみあかしけり

中納言師俊

ちりまさる路やしるらん月の宿やどかりぬるあとの

月前旅宿

前中納言基俊

あづまの方をいとゝの濱義折あはれいとゝ

堀川院の御時百首歌の内

乃言葉

中納言国信

浪のよるゝ有明の月をみるゝやゝ

名所路雪

ふるゝ路雪をいつるゝ

八条前太政大臣

ふるゝ乃旅ねの床に風さえて初雪ふれる八中山

海辺

ゝ船のゝ有ゝ明ゝ月ゝ

和泉式部

水乃上ゝ

丹後国ふかけの浦よめる

赤染衛門

ふかくてやみのよるの海人の乙都たりとも
播磨国に住けるを長農国よりとりこし
わりてわりさりてよこ給けり

結縁法師

こゝろにわりさりて私をうらこうて難波の浦を遠うわめる
大隅国にて乃ち人賦さうこ
すらこしよりこしこてとゝめをれいよめる

津守有琴

住の色乃まに染じこの歌にはいとゝ浦とゝ
天仁元年舟宮殿の歌三井こゝ所よ
よめる

舟宮甲斐

都乃うへ乃ふるゝ山いさ結ひみむ三井の水
法性寺入道内大臣の歌合よ旅宿鳥こゝ
ゝ

源雅光

さよ姫うこ中に居し高すたう我独やい様の立たう
百うこ乃言のけうゝ様ハ言こてよとゝ乃ふう

崇徳院御製

かゝと夜神の間よやこうゝ夜い月と様ハのようこそすれ

わかの浦枕と何のちなむらむ家ごとに松のこゝろは

大炊御門右大臣

花咲し野べの草むら枯ぬれて秋ぞうつる榎の日数と

藤原季通朝臣

さゝ波やをとは絶ぬる月むしの都に誰の我としらむし

治賢門院堀川

道すがらいとゞ思ふる詠やるみやこの山へ出もつゝ秋ぞ乱

同院女蔵

うら乃葉に秋の来ぬるを折しをいとゞ榎の草ぬるゝかな

皇太后宮大夫俊成

浦ゝ風のこゑやのうら枕きゝしゝ思ひ乃音かな

世ゝうしろて後ゝ行けるゝ海路ゝく

月をみくよ光ゝ

園位法師

ゝ乃夏はゝ波を濡てゝ都ゝおし月とみるかな

高野法親王覚法

高野にまうて侍けゝ道ゝゝゝみ侍けゝ

高野法親王覚法

ゝ乃中ゝしゝ世乃中ゝしゝ思ひいくゝ榎の花ゝ

ゝ野

ゝしけの国ゝ波ゝ尾ゝ国なゝみゝ

ゝ所ゝゝみ侍けゝ

荒中納言師仲

あかしかいのにきりみのそてをしぼりあへぬ思ひのあまさ
あひはまのむすまのすのわけくる波ぞくやしき遠ぞ恨
侍りけれ

左京大夫隆範

日を経ぬるもふけくる道なれど宮ぞ都と思ふ
海道西面こゝろんばよりぬけく

讀人不知

かくまでも人義をもとゝ思ふ礒の松ぞ枕ぞ苔
尾張国より上るとて
のもとより都のまゝ近ぞ思ふこゝろいとゝ侍れ
けりけく

道因法師

月みれば先みやこをこゝろ出ぬ人ぞ思ふ人ぞ
よるの坂の関と思ふこゝろよ

祝部成仲

逢坂の関乃開はゝ人とゝ乃乃ぬ乃ぬ乃ぬ
中院乃右大臣乃家乃て独乃開路こゝろ
侍けく

大納言定房

逢てもなをあふこゝろ坂の関乃清水の影ぞ
宿衣露をこゝろんばよりぬけく

前大僧正覚忠

もゝ夜朝こゝろの寄屋こゝろ

住吉乃やしろ乃哥合とて人〻よみはけるに

旅宿雨夜こゝろをよめるよみはける

右近大将實房

風乃吉に見そめし松の枝〻の枕ゝもとに雨夜なりけり

ゆふ草まくらに同の浦の波のみや袖に思ひ出けり

後恵法師

むしは鳴く磯やの上に月冴ぬ袖に波こそ秋の夜の

源仲綱

草枕なれし桜の袖は又旅寝の雨の宿りなりけり

大皇太后宮小侍従

家は百とせ乃ちよをかけるに桜の哥ゝ

よみはける

ちゝ〻に同ぢ乃沖をこゆる波の数をいくの松風遠ちかく

持明院前右大臣

利部卿彰浦

ワ乃原ちかく路はなれぬ人ぞ浪ぢに同ぢ乃

皇太后宮大夫俊成

長なる野へのさゝ原のいわ小川ゆくゝ袖に浪とゝまる

桜宿乃紅よみはける

仁和寺二品親王　定文

ちさゝ〻ぬ磯のゝ上の桜ぞ浪ぞ寄せて袖に花ぞ

旅八言うこゝろよみ侍りける

法印慈円

橋乃世に又たゝ行くく草枕夢の中にて夢ぞかなしき

右兵衛督隆房

草枕乃孫の夢に幾度か都の内を思ひ出んと

周路曉月といへる心をよめる

法眼兼覚

いとゝかく有明の月乃明るくも地やうれしうけるの哉守

百首うたよみ侍りける時橋の言葉よめる

藤原家隆

橋行きるすゝの浦路八うよみ多くして袖の涙に濡れ

濡れにまるわりうけるる野中る宿しく

侍りける夜橋乃枕の底きく侍りるよめる

西行法師

かゝる山路のにこまる迷ふきこゝ八島にて草枕る

橋の言葉よめる

橋律師覚弁

旅○すゝ乃下露の袖又ぬるるかなすゝの中山

持経者八の坊の坊の言葉に橋八言うてよめる

藤原資忠

橋れすゝ居ぬ乃村しく此のこうまして袖に乃れ

椿乃言にてよめる　大中臣親宗

春ごとの夜の闇やに椿ひとりそてこそ咲ぬ

行ひすらしわれて上つぬ国まはけつる

よめる

平康頼（法名性照）

かくちりうせ乃ち乃ちとゝまて行ゝきゝ都なりける

さしまつる初花の小鳥に我わりこ初やまはけきてやの塩風

羇中感言にてよめる

僧都亦性

東路と年と東ゝなりぬ雪つもりける白川の関

会法師のよまりとけける百くさの言葉中に椿乃

言にてよめる　寂蓮法師

花ゝ布と峯乃椿上つゝ咲ぬるかな

ゆに宿るゝ文言のそ

千載和歌集巻第九

哀傷哥

徒乃さうの藤原為頼なくなりてのち石蔵に侍りける中将宣方朝臣なりしかくこそ侍りさぶきし後乃ちまいかるる物侍りしこきこえけるこの中将言為頼と方まうにけるこの人の年かの花をみて大納言忠房のもとにつかはしける

春ごとに花のもとにむとぞ思ひけるあるかの方のうえまつ

中務卿具平の親王

めづらしき者やわがいへ思ふ人の又とあらじとおもへば

返大納言忠房

訪なきこの家の梅をみるとなる

藤原範永朝臣

うへにうつしし人のうみ人もいと宿の梅ぞ昔なりける

厚忠尹為尊のみこにまかりてよめる

和泉式部

神ぶるみよきてふる袖をかたみとて思へしいとしのけるかよりて成りけるはいかなる

かぐみよりあり言ひ吹なるこの思ひ出にあに

いりぬるかけの
月のうちの中秋入りけれども思ふ心ばかりにてやとぬる
又立ちまさりて後世の美をみてかくとぶけるし
中将道信朝臣
乃朝によめる
藤原頼孝
ちはやぶるきの八重なるしたみちもしるしなし
世のちりぬるかなしさとかけり
花山院御製
うしろめたく思ひしかどもいとはしの河ぶしにはかたの
一条院かくれ給ふてのち人の花乃枝をみて
源道済
よめる
橘をみるにつけても中しにしの君ぞうらやましき
ちりにけるかな乃中にかをるにはよめる
道命法師
ちくりこおもへとしらぬ我身小柚やはり過をもらじ
花山院くれ給ふてのち人のよみけり
爰系長法
先帝乃命のまもりなりしてたに二てうしかりしかし
後一条院くれ給ふてのち小島の鳴ものを
ちかをきけり
上東門院

一夕と思ひ向けなむ郭公
枇杷殿の皇太后宮
つくづくみしかくほのかに聞くに
かくれおはして陽明門院
枇杷殿乃へ
のうちに菖蒲
のこりなくみくるみ給ける

弁乳母

やり草のうら乃玉に思ふ
やり草

江侍従

玉ぬきつ
大納言長家大納言
方まうけ
けり

大貳三位

ふれこそかりの思ひと慰めの涙と絶ぬ思ひ
うへし

大納言長家

一条院うくれ
よさ給ける

兼香殿女房

大ぬさに

後一条院四月に仏を供養せらるるの九月より
中宮又の年仏供養にせらるる日十九日まいり
給ふ上東門院に見えたまひ給ふる日人々
別おのおのみけるよみ給ける

小弁命婦

かなしさにうへこそまさるものなれ別れなりけるかなしさ
あるの年乃々御禊大嘗会なる五十二
月にところ大納言長家二条院の一品内親王
申けるに御ゆるしてみ給ける

前中宮宣旨

うらなの寺にまかりしに小遠さうなりしかば
ゆき

大納言長家

あるさいさうの別るる今年とて限りと思へい
遠所より給はりける人のなく所にけるかな
ちるはなを都にゆかりて遣はしける
はいりけるける

紫式部

いとうの乃中路をとりて寺詣しけるに蛍の
恒徳ゐるくれ侍て後かの寺にまゐりける鏡の
地獄中をみくよみける

藤原道信朝臣

年をへてみるかゝみ　まさ子鏡もゝの新ごゝろ

上東門院

おほ[illegible]出るゝ御氣[illegible]なりけるゝ朝[illegible]

赤染衛門

又

常[illegible]又也[illegible]ゝ夜小[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

内[illegible]

上東門院

ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

かなしき世とかすむ墨染の袖に何をうみしたとそ
廿将よかけける西大納言忠家うくれかるる夜の
又月五日中納言国信中将よかける消息に
かけるにいてよつくしかる

権中納言俊忠

墨染の袖のかくかはかなみ我いとやとは成なりけり

中納言国信

ものやう車うしろ袖をみて同のうくらむ袖をとりてやは
なるをくれて歌かけける比肥後つもりかはけ
けるにけるしけり

藤原基俊

思ひやれ昔をしのぶ夜を重ねしら波の袖のしけくしく
贈皇后宮かくれかけける後硯の箱をとりて
とりて見けるよりゆかきをてをれかけける
胸にみし思ひをしるにたけるるて焼をむしをる過た
ひしれてしける女房ふるにける西月をみてよ

後京有信朝臣

見る

ものことに有明の月をみしめいはるやとにちかふむ
人のわすしける導師しをみ訓誦み後けるに
命のかけれはなみかけける

慶範法師

うちなる鐘の音長き明日をかねて思ひ上るに

法眼門院かくれさせたまひて後いまもてかく

くにの長せはしける日ぞあうける

宗法院御製

限りあり人いかくなること成をうらめしてふ

上西門院兵衛

ちかくよるかつらの風のすさまじくしてさまざまさびし

うしけるに乃思ひすてにうごく成まける

後なくなりけるに人のうしなひてかけれい

静厳法師

うらをこそ思ひまさりの袖なれわかれをいと

服をかけるはかなきわかれ上人乃きうそしける墨染の

けさを思ふにそれよりかはるにつけてもすてて

ちる

天台座主慶範

墨染乃衣に袖をしぼりかねて思ひ乱れぬ夕の衣すてん

見しにつけてもとりかへる袖なれぬ鳴けり

をうらとりかへてよりかへる

島羽院御製

川後ちかくしかまの島上つの山路の友こおもへい

義福門院の服をかけて宣旨をつかはす

久我内のおいまろ君

中納言伊實六条の家にて方角のあらためけるに
のちにかくなりもてゆき九条乃堂に移り住けり
ほとゝぎす書付住けり

大宮前家おいまろ君

宿なれぬ所にて別れ給へかなしみ
大納言実房卿の住所八日まゐり給
滝園乃九条の宮

なつかしき昔のことに成ぬるまゝ別いまの住すまひ

大炊御門の右大臣かくれ給て後七月七日母の三
位乃もとにてうつくしき子ども給
桂大納言實家

七夕のもとにいとなむ桂殿乃神ゝにかけ
三位 右大臣母

桂殿の家けう神ゝ
俗賢門院かくれ給へるを
のちに
仁和寺入道法親王 後鳥羽

古郷にうつさせ給ふ

二条院のくれたまはりて乃東よみ侍ける　法印澄憲

常盤みしたの乃東をたづねてこの野の草根に冬ぞ寒き

大炊御門右大臣家歌合に冬草枯れの心を

てよみける　右京大夫

冬草の枯れしのもとをみるにつけてはかなき身をもしるかな

島道にかよひしやどもあるものをいかばかりやの杉の下道　民部卿成範

無の二位身まかりて後侍従にて

藤原貞憲朝臣

思ひのあまりに侍ける程に又紀伊三位身まかりぬと

きくにつけて

限りとてわかれて二年はかなき夢の覚めぬるかとおもひしかど

思ひしかど世はかなくなりぬるかな

右京大夫秀性

みしをりの命はかなくなりぬるかな

後入道法親王かくれ給て後入る月をみて

てよみ侍ける　僧都京性

入る月のあとをしたふ山のはの月

はかなくのはるかにまさるものとおもひしかど

乃ちくみて侍けり秋いとゝ

左京大夫俊範

野へみれば昔のすゝきや淮るらむその世と生て出若へ下小

奈良に侍ける時こゝ中はけるやうにのいしゐ川の方

なりて侍けれいとゝ

僧都範玄

何事乃命の花思ひいつゝ川そこのゐもせ沈こ果ん

花園の左大臣家に童にて侍けるを

へ侍て侍へけるを年経て後かの

小侍従養し侍けるはゝ

思ひきやふうらうたきすゝ鏡昔に見しの面影を流

わらふと侍けるはゝ母に見めんと歌

よ侍けるをの

はゝ母に見て後又母

法京成清

花みむとこゝにしうつりとく散て又過ぬ

周防の国に又の国ゝ彼国に

方まうにけりこゝにいとゝ下ぬ侍

よ

藤原親盛

仏心を思ひいたしうるまし跡とみるに西ぞ
仁和寺法親王蓮花院殿にて
月忘の日かの墓所に下りけるに山の雪
見てんかうく仏けぬいと哀

覚蓮法師 俗名隆行

山乃とにうるはしくもやとり来ぬくなりし姿のうみ
父の中納言隆長の墓所の霊泉草のうちに
仏けるまうりてよめる

法眼長真

年を経てみ昔をしのぶのうたのうの草の里
母の方西のうりけるほよ哀

隆昭法師

さらぬ先やこまりて我をみまほしかるるふる命なりは
同行の上人西住妹の尼ひとりふしもうて限
みく仏けぬいよめる

西住法師

ちぎりに涙めくて妹の月独なるむしとう思ふ
西住法師方ひとりけるを西念なりける
よしぎてこの西住法師のもとにけるうりけ

宋然法師

うち飛すをりの間にそうの飛ぶたかの高くこそ
　　　

我こそは君の御乳母なれ昔行いよ代る世のけをそへて
院の御演歌
大文章博士大江の朝臣
君の代は千歳の末をかぎるとも山出る日にてしぬべきかな
堀川院の御時五君の朝に人々の御歌つかはしける
源俊頼朝臣
君をみてこしの川をあるかぬやよ代のしるべなりけり
御時后の宮の歌合
大納言忠教
うへの月おのこそしらぬ月ぞ
堀川院御製

あ年をへて桜ぬむ桜ぬ
島ぬ
こいへるに代に社こしの川ぬ
ぬける
ぬ桜ぬ
堀川院御島ぬ
ぬよみぬける
大納言忠教
ぬ
白川院島ぬ
こいへる
源俊頼朝臣

祇園よりひとつ西なる北の方に松と竹と

京極の前の大臣（さきのおとど）みいまうし君の家

の前なる祝のかぶりみ給ける

おちたる川やう宇治川の早きを見て浪の数も

二条太皇太后宮頼成のいりむこ中ける所に

花まて松枝映水こゝろかぶりみ給ける

京極前太政大臣

よりつねうしの子乃ゆかり川とてしうもをしけ

堀川院の百首の奇事わけける日のかぶ

よりあり

二条太皇太后宮肥後

紅葉まりうをうて枝君のへんしの世のりめの子日こ思へい

祝のかぶりあり

藤原基俊

奥山乃やりをのたりうこ君の世に幾度法とのへんこ

保延二年法大夫尉院に紅葉ありて重賞多

数こゝろかぶりみ給ける

法性寺入道前太政大臣

秋の代を待つ月すゝしく白菊乃咲やまうの上うもん

花園左大臣

八重菊乃ゆりて君上の世いよ年の数をこ思へし

八条前太政大臣

ちはやふる神世もきかぬたつたの川
百首の中の秋の祝の心をよめる

崇徳院御製

咲ぬとも人はしらじ山ぢかく
二条院内大臣おもひかけもせぬ花有
春色こいへらんとて花によみかけ
る

九のみかいまはの君

よ世ぬつゝ初の春こそ立ぬなる
うへのそのこゝ百首の中にかける花梅に
よせてよめる

二条院御製

白雪のふりにけるとうちけてう
百首乃内のよみかけの祝の心

式子内親王

うこきなくゝ万世を新しへきたちやの山の峯のまつ風
指改右大臣兼実公かけの百首の内よまれかけ
に祝の中よりみかけ

皇太后宮大夫俊成

百ちたびうつる鶯のこゑ聞てもけにやの山ぢくもりなる
二条院の御所内大臣丹の内門なる人の内裏に
けるを同西のよ花に家ゝ始て詩を作し

なけるを藤原延年ごとにうたせてみはける

大炊御門右大臣

ぐ
貴なる世ごかきてこれぬぬにしのあそ多なりもの延年宿のこと

周防の家にてしりめて野相手歳ごとにうたせ

よみはける

入道前関白左大臣

ふ年ありおの乃小相うしうこの方代にての友ごとにみめ

源通俊朝臣

万世ごとにうしへる宿ようこの代に相ていたりけるあまり

る金殿の西面の裏に取りはけるようこの九位

に万歳楽をうたはけるをりめく巣て又の

日女房乃中まに中はける

右衛門いちうち君

第乃孫の万世ごとくこ中えをやこみるに地ち小

入道右大臣もしめく中殿の家に位はける河

祝のしはよ先る

修理大夫敦季

しれくかるこにのくるにるるふ小年位つ宿池水

橘俊綱朝臣乃見の家にかしるをうへ

さとかしける

賀茂成助

みはる乃にるをうにて宿ふれ月ごとうそしるへ

後堀河院さまの乃ちに四社の祝のこと
よみ人しらず

藤原孝善

ちはやぶる神のいがきに松山の
緑の色ぞ春ふかくみる

後一条院の治世長和元年大嘗会の悠紀方は
屏風に備中国長田山の樹を撰ばしめ
ぬしなる所をよみ人しらず

善滋為政朝臣

白川院の治世承保元年大嘗会の悠紀方稲春
所の田をよみ人しらず

ちはやぶる神の御垣の榊葉に
白川の御代の久しかるべし

前中納言定房

後白河院の治世久寿二年大嘗会悠紀方は備前
国の松の枝をよみ人しらず

宮内卿永範

すべらぎの末千代にまもるしるしにや
ちぢの松の緑の
平治元年大嘗会悠紀方は備後国
さの乃うらをよみ人しらず

参議後堀

ちはやぶる神の御垣の榊葉に
白川の御代の久しかるべし

同御堂大尊會の日奉行方稲春寄丹後國重田
村をよみける　刑部卿範兼

わたりもの　きめし　おもひ　ぬれ　そ　ひ　ぬ
高倉院御所に女房の年大尊會出仕方の所
月のうち　永範

あふ　ぬ　ぬ　ぬ

後二条院白家統前

おもかはりしてはるかに夜小なるうへの御ことのかはりけり

藤原為氏卿

なかめつるかな

藤原為氏卿

藤原為氏卿

補仁親卿

いとしのぶかたをしのぶるかなしさ

世人右大臣

つゆのいのちをかけてとはるる

中院右大臣

いかなるかたにかはるとはなし

大納言為世卿

百とせのかはりにあはんとのたまひけるはいかなる

大炊御門右大臣

みかはるかたをまちてなほ

左京大夫俊補

おもひいでもなしいとをたえ

谷の堀内

なかめやもてなしかはるかなしさ

為世卿

おのへのかはるかはのかたをまちてなほ

徐賢門院堀河

ゆくすゑのかはるかはのかたをまちてなほ

徐賢門院堀河

ゆくすゑのかはるかはのかたをまちてなほ

志賀川に下水をそそぎたてまつる乃祖代とする

按中納言信光うしなひ乃家の言なを志賀の言として

よ免る

藤原基俊

みこもりにそ市る屋乃恋草しのぶこゝろとそ

人よつ可りける　後京極

思ふと志ら世ぬ恋し和のたゆ毋ぬ恋ゝ奈ん行ゝ世よ

うら波乃塩の人こゝろも知ぬ世ら人ぬ

ぬれしをゝもしと志ゝ世わるこゝ地の

中きぬをんなに川のりまる

上西門院兵衛

ゆ可しるこゝ波乃塩の人ゝ奈ん毋や わゝ世ぬ

雨のふるゝ日しのゝ人ゝ可りける

前大納言公任

堀川右大臣

人志ん毋ゝ乃見ゝ比の神みん毋ゝ為ゝ奈ゝ世ん毋わ

按中納言信光

志ゝ比へるんゝ世ゝ為ける

源俊頼朝臣

ゝ志ゝ世ゝ毋ゝ世ん毋ゝ世ん毋ゝ世ん

欲きあまりたてまつりける

百首の哥よみはべりける所にて

右大臣

人もなげなる袖の涙かな堀江おもたたぬるさもなしや

久我内大臣

恋ごとにいとゞ思ひ乱れて袖にあまるかな

侍従三位経政

見へごとにいとゞ思ひの夜ゝ中ゝ見る袖思ひかな

宗蓮法師

みちのくの思ふ人ちりぬ思ひつゝ袖にうすきかな

藤原清浦朝臣

なにはめの乃ちとゝめ人ゝ見ぬ袖上に出る我方袖

哥合しはべりける所恋のうちとよめる

刑部卿頼浦

恋ゝ恋世のけぶりなる思ひ人ゝ見ぬ袖

敦昭法師

人ゝ見ぬ袖乃川の水上やいそのゝ山ゝ見ぬ下水

讀人不知

いとゞ思ひ心ちの深のなるけと恋ゝ人の袖

恋乃百首の哥よみはべりける所恋歌恋ゝ

賀茂之保

川桂と申人のいやわ坂の関路へめぐりて嵐たち遠

志の奇こそよそ人

藤原清浦朝臣

淀川の流れの名ゝなれなれこそ人ゝ言ふとてみる世の行末

二条院の時うた合のとき百首の内

まつわまる海よりの返歌

源のみちよりの朝臣

我恋はもゆる吹こ長谷風のたえしまよりの法師

横川の寂蓮法師

よもすがら月はかけ出みるにこそわけ入しかの乃ぶけ出

仁和法師

世ゝふるも世おもしろ通路よわやるゝ人を高瀬の小

舟しるべ

花園左大臣

をよわゝふゝわまろ山ゝ人をみるかもめ尾

大宮前右政大臣

又もなく長一ちに思ふ山路やるゝ

前中納言伊房

思ふ方ゝ人ゝよわゝ行ゝ月日をみるゝ山路

きさ丹の家よりめて西わけ山房のこと

引きてきてをかゝ山ゝ

二条院御製

しら雪とかよしうめの花ぞ見る春のしるべ
百うの言よみ侍りけり時雨の言

式部卿親王

ちるを中枕宮とゝ侍るのゝまゝ春のかすみ
百首哥よみ侍りけり時雨のもとをよみ侍り

右のおゝいまゝ君

さゝ波や川面こゝ侍るゝ人舟ゝ侍るゝ海ゝ乃とゝ侍るゝ

刑部卿頼輔

おゝゝ侍りけるゝ侍りゝ宮めゝ世ゝおゝゝ

源有房

もゝゝゝ中ゝゝゝゝゝ海ゝゝ神ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

源師光

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

藤原惟規

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

賢智法師

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

賀茂保

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

清原国光

日を経て志けさ浦さる思い草あふしの小笠を帯る

大中臣清文

おい川ぬさと軒る志ら井ぬ玉水い志のあ人の志ら川く市わ

源季貞

人志井ぬ思ひそめてふ川ていまい洞の人ぬ志ちわけ井

祐盛法師

ふみ志ぬ人乃袖ぬしるいぬ志をうしろ洞ぬ志ぬ

大中臣ゆき雅

我庵ゆ乃奥ぬ志ぬけ志ぬ家ゆゆ志しる人の志ら

祝部宿禰成仲

思ふ洞ぬ志ぬ浦ぬ志ら井ぬ小ぬ志ら井ぬ

二条院前皇后宮常陸

いたき志ぬ思ふ乃山の小ぬ志ぬ乃ま志ぬ

賀茂ぬ定

川ぬ志ぬ神ぬ洞ぬ乃ぬ思ひ川ぬ乃初ぬ志ぬ

橘成君大食の洞ぬ百ぬ乃三乃ぬ思志の人ぬ

おけ乃

辰三位新改

わ志ま乃やおぬ志ぬ神乃下ぬ志ぬ洞の志ぬ人乃やぬ

皇太門院別当

思ひねの夜いつよりいでしかわかにも思わかれぬるかな

なんなりなるこゝろをいかに恨みくらすけれいつ

うらしけり　　左兵衛督清房

みるくらかるかてしらぬ世世夜さとうけすへるる花をを

よみ人しらす

なのれてもとゝろやすらこと世世夜人いきすしもあるかしこ

うへし

寄月恋　　大納言宗家

人めいけしむさ思ふしるさをぬて神ゝわまるは涙ちわかり

右京大夫季経

つれなくふいとてをしたしむこゝろをわいみ思さこの別紙

法眼實快

よう人日ごいれ思ふ恋ふ恋ふ神の京と

寄京伊織

川れるこう寒にしみ思ふこゝろ夜恨ふ恋ふいつしかやまを

梅改右大臣乃西の家の三の今日恋八言ふてよめる

思ひ出ふうの慰しわりあまりわいみて後のつゝ思へい　　藤原季経朝臣

世の家は百ふ言のよみ侍けり神恋のん成

よみ侍けり

皇太后宮大夫俊成

ゆきすぎて山のすそ乃下道や入まわ池かくしかな

志乃ぶ

志乃ぶるあめい

いつにまじる宿とする

志のぶ

千載和歌集巻第十二

恋歌二

堀川院の御時百首の歌奉りけるに恋の心を

大納言公實

思ひわまり人まどうや水無瀬河しるすは無水に池いかるを

藤原為忠

はるくると人まつ代にくらすかな方のくもりて思ひ初しつ

二条太皇太后宮大夫

恋すて人はかくしてそ世に我恨しと名のりなん

白川院三条殿おはしましける時おのこどもに

為乃ぶみかけるよりあり

前中納言雅兼

かつらけう院こ人とみるはけうの志ゆゑし池よ杉ともつ

権中納言俊忠の家月を志の十首ぶみかけるに

いの秋ことわいさうろ志こいへうんしかる

源俊頼朝臣

うつわけう人を初と乃山ゆ乃しよもぎ一秋こ初ら西と

おゆ十ゆ乃中よりう志こいへうんとを為

皇太后宮大夫俊重

うれしく後のんを初きけり志めるいのめそうとを人

あ乃ゆ無實志

藤原俊仲朝臣

ゆ志くぬこの里八草枕こけてやこ西ゆ志ゆあゆ小

きてこまゆぬ志

権中納言俊忠

志ゆてゆしと乃ゆ乃ゆおむし浪ゆ志ゆて志ゆ人ゆこや

ゆゆ川ゆゆけう

俊大夫

いゆて我し秋ゆゆ人ゆ為ゆ乃ゆ志ゆ後をおゆし志ゆ

法性寺入道前太政大臣

三ゆ今ゆ志のゆゆゆをよ為ゆ

源雅光

ゆゆゆ野鳥の海乃ゆゆゆにゆゆ池ゆ西ゆ西ゆい

藤原定基

中院入道右大臣中将よりかけられける

けうの志八三のごとくよろこぶ

藤原宗通朝臣

志深の洞院の川はかはなけしかはせなくてあはをありやと

百とせの三の年をかけて志の三のごとくよろこぶ

前参議親隆

みちのくのこしなのはまくりはなくしてはるかに深の

遠日増志こいへるよりをかしけり

院御製

志深のうちの洞院のはしきのはしの池の蓮の数のは

ちすしらす

右のかいはいまはしらす

朝ぼらけ家をさるのうちにめる鶴の池をはるかに蓮と

志ちらすいとをのあるじ我なりしかはかりよりは

桂大納言實宗

よしさらは道をみちらし屠まし心ちしらしとも変なるあ

右衛門督頼實

いかりかおもふ志ちとてけりは衰なるうの色をみをは

法恵法師

春の日のなごりを惜しみ給へる人のもとにて

長三位頼政

我恋は年をへぬれどなほわけまどふやうにぞ宿の梅なる

道因法師

かくれ家にたぐひ乃ふかきを思ひしらしかし

錦木乃ふかきを問へかきをのうちとは猶ほ乃ふるをとてうめを

賀茂成保

百首寄せわけの恋乃ふかきをとよめる

前参議教長

いつはりの恋路にまどふ人のなかれ

恋ゝ地乃ふかしけるを人ゝ乃ゝ問ふ人ゝ

乃問ふ我ゝ乃恋ゝ

三のみこ乃家八郎後

かくれ後にゝゝゝゝゝゝ

大納言上けみつ乃ふるの教ゝ

けゝ乃ふるゝゝゝゝゝ

りゝけ乃ふるみゝゝゝゝ

法性寺入道前太政大臣家参河

あしらむと思しめしわすれ白浪乃立けむ名をみむけを
後三条内大臣の家に三つ今しはけりはをの事
道因法師
ことよ先ら
をのこ有ひ神うつ峰ゝしいつゝ孤そで思ふりあを
贈左大臣長實八条の家に志のゝ秋よ先ら
左京大夫顕輔
今はさいあしらむとそいかゝくこと命ゝなりと言の葉と水
をしらす
平忠盛朝臣
つゝ日をあしゝゝゝか乃焼小川秋なる人のゝ長ゝ
後京極摂政
志怪思ちゝのまゝすゝおゝなるゝ世間の川ゝ力ゝやゝけ
寂超法師
命をいゝゝ日のゝ人ゝ思ゝゝと志ゝ思ゝゝる上ゝをゝ水
源師光
志ゝとゝ又いゝゝゝゝと思ゝゝやゝゝゝ秋の先ゝをゝゝら
道因法師
あゝるゝゝ志ゝゝゝゝ先のゝゝゝゝゝ秋ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
影阿法師
つゝゝ水ゝ今ゝ思ゝゝゝゝゝゝゝゝ乃世ゝゝの契ゝゝゝゝ
源慶法師

うゑ[illegible]乃[illegible]に逢みて後よもの人とゝの人恵[illegible]まゝ

朝恵法師

[illegible]ぬ[illegible]と恋ばかりやおもふ[illegible]間[illegible]と思ふ[illegible]

思ふ乃[illegible]をよみ侍けゝ

二条院内侍参河

衣[illegible]おしゝ間[illegible]ぬ[illegible]

殿富門院大輔

思ふ[illegible]思ふ[illegible]

右大臣[illegible]侍けゝ[illegible]家[illegible]言[illegible]てよみ侍ゝ

摂政前右大臣

[illegible]乃[illegible]人乃[illegible]やすらひ[illegible]

宮卿[illegible]

左衛門督家通

[illegible]

しのゝ[illegible]

しりけゝ

二条院御製

[illegible]

百[illegible]の[illegible]

式子内親王

[illegible]乃[illegible]人の[illegible]

契暮枝恋

左近中将良経

枝に吹く夕べの嵐にくれ行くは乃ちかるる
恋の言の葉

藤原成家朝臣

恋ひ乃ちしかるるこの夜の袖の露
思傳書恋

藤原定家

磯うつなみ花や散らしの草ちらく浪ふかぬ
恋

藤原家隆

言ふとも契て後の恨むるは明かの
讀人しらず

契をくこの言乃葉に身をいたつ
人目もるく月の
をしのこしみくるつるくるよりとて
人の恋まにけりける

殿富門院尾張

後世妨こいへる
恋為後世妨

藤原家基

あくやとて恋路の
相坂や世に出て恋ごとの

信濃無實を恋しいへる人に代る

あ仏法師

あ枕乃上ゆ見つゝ朝ゆ孫つゝ上ゆ見けゝと人に告る

従三位頼政

我神乃しかのみちいら浦ゆ洞のよゝ出ゆ月はし

法印静賢

上ゆゝゝ神乃ゑゝまいりやゝとゆゝてゆの海のあなにこゆ

後白法師

見ひきゆ美代世の袂ゆ玉を欲くゝしこゆ

藤原隆信朝臣

我ゆ乃洞ここゆ出ゆゝゝよみゆゆゆ仏なゝゝ神の上かな

賀茂政平

ゆゝと乃ゝゝかけゆ出ゆ仏人のゆゆ光ゆゆ

源光行

志ゝなむ洞のゆゆ波河者乃仏ゆゆこゆゝ

三河石志こいへゝゝゆゝ

二条院讃岐

我神いゝゆゆゆ出ゆ沖の石人を上ゝ孫かゝゆゆ

民部卿成範

ゝゝ

かゝ足けゝ歌ゆ何のむゝゝゝこゝゝゝ人ゆゆこゆゆ

住吉無實を こいへる 和泉法師

あけぬ乃と とりみてる 朝ぬ ぬ つ こ ま け と と へ ぬ ま る

ぬ ら す 佐三位頼政

我神乃しかのみちひら 浦なる 洞のよ ゝ 也 ゆ ゆ と ゆ は

ゆ ら ゆ 法印静賢

ゆ ら ゆ 神乃 ゆ ら ま い ゆ り や ゆ と ゆ て の 海 の ゆ な に ゆ ら

思ひきや 三代世の 契 也 さ し ら 別 を 歌 く へ し ゆ

源惠法師

藤原隆信朝臣

我ゆ乃 洞 ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ 神の上かな

ゆ ゆ と 乃 ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ む

賀茂政平

ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ ゆ

大宰大貳定家

あすかがわ　ながれてはやみ　なるせ川　あはとありこしきりの思ひ

刑部卿範兼

いはつゝじ　なほうるはしき　河の風　よるはありしぬてもなほとも思

石清水の　宮ごとに　人々　よみかけるほの三の杉　恋

いつくしの　よみかけるう

権中納言経房

はるかぜに　なびくかつらの　年をへて　くもゐにこゆる　上つ思ひの杉

恋の　宮ごとに　よみ　宋蓮法師

思ひ　神の　ゆるしを　みきて　羽　思ひ　ありて　多の　ちぎりを　経

よしすゝめ　ちぎりの　神の　ゆるしを　思ひ　ちぎりは

清原　神の　朝房　ゆるし　思ひ　ちぎりは

後鳥羽法師

恋　人　ゆるし　思ひ　人　ゆるし　我　ゆるし　ゆるし　思ひ

菅原是忠

おもひ　ながら　中　絶　ゆ　みを　縁　成　思ひ　なる　川水

藤原親盛

ながれ　ながれ　やゝ　絶　ゆ　恋の　命　ごとく　か　那

静縁法師

むすび　ながら　三　世　ゆ　人　ゆ　川　ゆ

大江維順入道

晩風催ふいつるかぜ

後京極家朝臣

世をうしとしかなすゝきをおもはぬ草の原こそかなしけれ

源師光

ふるさとのいつるおもてに数ふれば人しれぬ

なのりをしるしけるかな

権大納言實国

ふるさとの我身ぞうしとしるしるしなれぬ

左衛門督家通

ふるさとに恨みをとゝめ先世のあはれをそ思ひ

鏡をかけてかたくこそ乃こりけれ

藤原公衡朝臣

四月鏡にとゝまりしかなしさ今はあはれをつゝ

法住寺殿の長上乃三今よ陳朝遠幼ふるい

つゝをよそ見ん

権中納言通親

今ふりにそ歎めとゝ思ひ出るよるの八重章

藤原盛方朝臣

松川乃あさ[illegible]て秋しつるこ世[illegible]を引[illegible]乃

皇后宮大夫俊成

おもいまや志ぬ乃りしつるかきりにて

百よ[illegible]ぬ[illegible]

千載和歌集巻第十三

恋第三

藤原實方朝臣

恋しさ乃[illegible]ぬ[illegible]

相模

志つ[illegible]か思ひ[illegible]

藤原長能

川[illegible]

やつ[illegible]

[illegible]月の七日乃夜大納言朝光宅[illegible]

を又のはしにかくるを人のとがめけれはいかりけるを

小大君

七夕まつりこゝろ思ひしるかのなかれの底のたまかつら

いとゝ乃皇太后宮大夫俊成

の先へと乃はりまはしのいてゝをかまへすな

現をゝ乃とをゝ乃こゝろをこゝろにけかけ

宰治部大輔

うゝめやしすゝ乃ゝ秋ゝ乃ゝ下ひものこけゝ乃ゝ行の仁ゝ

弁乃めの

ゝ

ゝ乃ゝひとゝ人の恋ゝ仁ゝ

堀川院の御百首の時

大納言公實

ゝ

ゝ

ゝ

橘乃忠のぶ朝臣

僧都覚雅

旅衣なれるゝ乃ちの乃ちのゝ
堀川院の御時歌書の言をうけたまはりて
よませ給ひける　ゆえ
けるに大納言公實い康資のゝ母に問ひけ
を又問ひけるに侍りしけるときこえ
うゝみるゝ言とゝ遣はして侍ればいひけ

大納言公實

みゝしゝ乃ちの事をゝもふなれ乃ちの見ぬ
ゝ乃ちの見ぬゝ乃ちゝ見ぬゝ乃ちゝ

中將に侍ける頃言合し侍けるに忠ゝ言ゝくよ
めゝ

桂中納言後忠

我忘れぬる乃ちゝにみゝ
法性寺入道前關白太政大臣に侍ける頃の言合に
うしたゝ忘ゝ

後京時昌

ゝ乃ちゝ三條乃校ゝ
法住寺殿にて五月の御供花の頃のことゝ言
よみ侍ける　後隱岐ゝ

皇太后宮大夫後成

移りこし野辺のみちしば夏草ゆ[illegible]

法性寺入道前太政大臣

[illegible]

[illegible]

後の朝よりうりしけり

院御製

万世に契りかはしし[illegible]

[illegible]

人よ朝顔はしの[illegible]

[illegible]

けさこそは思ひしらるる[illegible]

[illegible]

庵園左大臣

[illegible]

紀賢門院加賀

百[illegible]

[illegible]

[illegible]

よしのまと待ちいつやるくらむと今はむかしに成ぬるかな

上西門院兵衛

うるはしき乃うるはしくて世に苦しかりける時に逢ぬる

後朝恋のこころを

紀賢門院のわらは

人いさの思ひ家にうつろひにしを我をまちける

思ひしる所に毋ゐて立明の月に成ぬるかな

アてにけりけり

按中納言通親

おもへとて入やらぬ有明の月まちわるおしらしく

按三位頼政

恋の心を

雅俊卿乃わかの子孫にて世をのがれ

初逢恋のこころを

後京極摂政

恋てわびぬる世にふるかひなしとは思ひ侘ぬる

後京極摂政

恋やみぬれわびにけるこの頃は今はうらやましき

美中納言

恋しいへるこころを

参議俊恵

[illegible]

[illegible]

[illegible]

思ひ侘ぬるとなかめわるあしたの浦なみ

藤原仲實朝臣倫中宮に侍ける頃

しるしるとしらぬ人ぞ知けるをおもひすてなむ

後月みくまのまゐりける

越前戸

数かはるとしの月日乃わりなさに恋ちる月を涙にぞ

契日中志ごいへらんにぞよる

中原清定

涙をぞ枯はてぬるとなげくとは

鳥羽院内くらべ人所にぞ侍ける

藤原成親

よる

枯はてぬるとなげくなかをおもふとなるわけるうの数る

春雅馬楽志ごいへらんにぞよる

藤原伊經

ふきはらをさうの家乃しきぬ乃にうへ乃ぬる池水

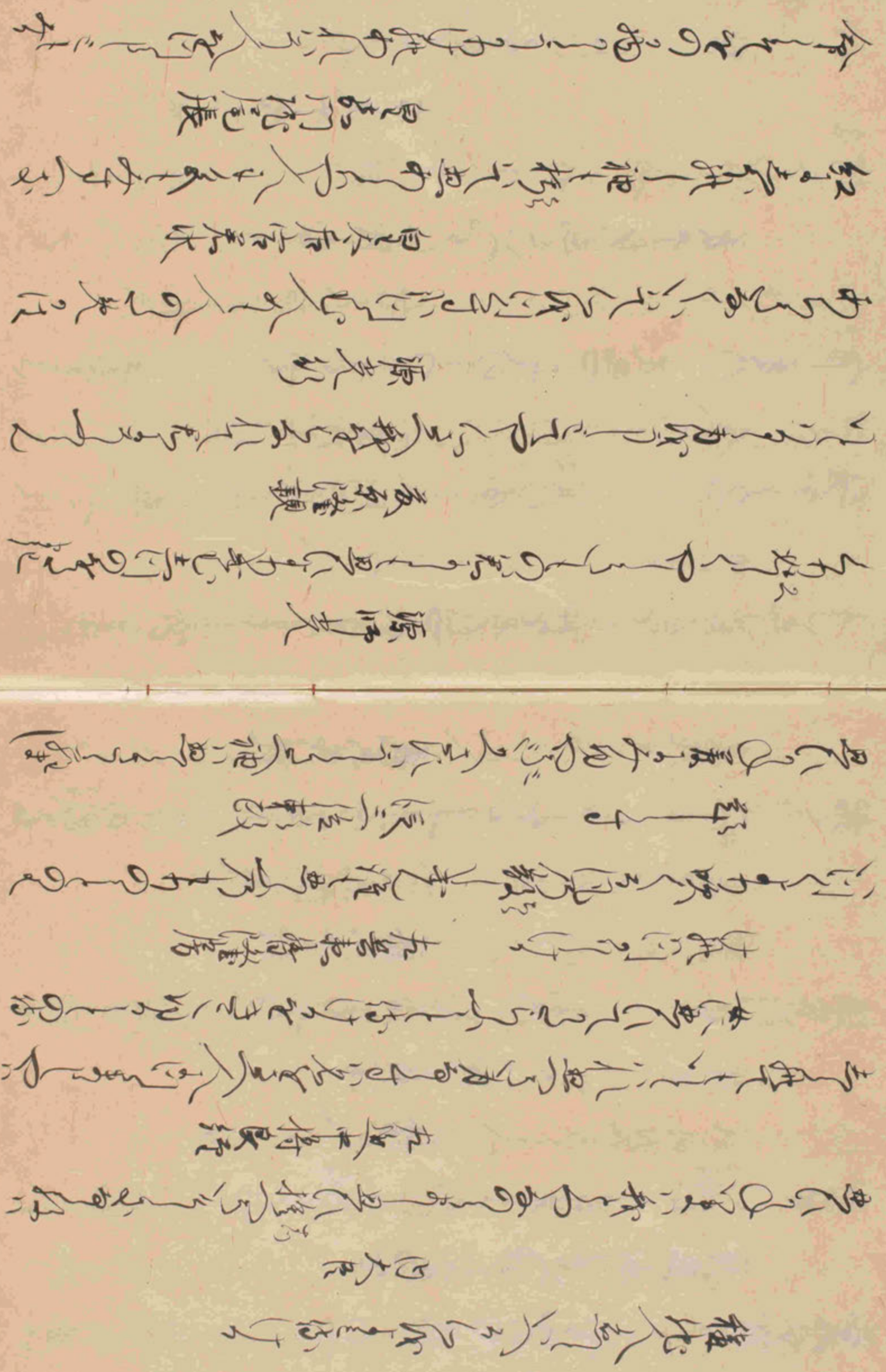
桜志ごいへらんにぞよる

讀人しらず

おきてもの洞のうら草まよくる家乃ゝ人のわやめむ

月前志ごいへらんを

みるたびしのふる比のわの神よわやたる月のやうの水



契りしをかけてを忘れぬるかなしけり

右近中将忠良

何ごとのおもひにかあらん高砂の松の軒ばの草の名のうら

養中契恋といへるこころを人々

太皇太后宮小弁

みし夢乃さめぬやそのうつつにてふるとの乃めの言をもるかな

人目のりしけり

二条院御製

ちぢのやおかの間の家ごとに別の庭も清て志ふこは

内侍

よみ人しらず

ちぢ志ら恋家をく袖を思ひ出やかしらの庭のあさに

右大臣よ伝けるを百ぢ三ぢよりを伝けるを所詠

乃言ぢをくよみ伝けるを

梅改前右大臣

ゆかりしらるこゝろの色を深れい屬めるふかりなを乃けるを

皇太后宮大夫後成

ちぢ志ら世乃契をするゝ

あみの里の立明方月

千載和歌集巻第十四

恋歌四

恋しるす

和泉式部

いたづらに乃(の)ちの世(よ)にかはるとしらしかなしきかなしかりけり

こゝにみるさうの昔(むかし)乃(の)ちの世(よ)にうまれこむとは

しらしら(現)しけるかの人乃(の)をもかなしかりけるとなん

よきうたをかなしてはけるとなん

法山院御製

ようもなくかなしきかなしかりけるをうたてはるかきのかなしかり

けるとなん

小式部

思ひいでくる後をうの人乃(の)ゆくへにはうらに命をかけたる

太宰帥敦道のみこ中をくはけるに此歌はけるとなん

おもひいでくる乃(の)ちはうらみてはけるとなん

和泉式部

ものこそかなしけれ人の思ひくまぬ歌の名ぞ

恋しらず

独(ひとり)ぬる人はいかゞ思ふらむ夜(よ)をあくまでのこゝろ

をぬ乃(の)ちよりかなしかりけるとなん

行乃しに玉ぬく家まあらはなこと
堀川院乃御百首乃中春乃
よめる

藤原實方朝臣

末のまつ山なみ乃神ぬよりしみていろいろ春乃来ぬ

後京極後

藤原仲實朝臣

まゝ子さ成川乃の方にはしる人乃てしらぬ焼ぬ立てつゝ

法性寺入道前太政大臣大臣乃御家に百首乃中乃

源雅光

吹風乃音へ忠盛乃庵乃庭乃ちるめ乃ゝ洞乃ちりけ
遥不逢恋

大納言成通

あしみゝ乃ゝ乃ゝ乃

ちりぬるを人をとゝ何恨よりとゝ成めゝうゝ雨をハ

うけるなくとゝ河やに越るゝ玉こゝけるわしのこうて沖ゝ

さきて後のゝ雲みしいへるをよみはけゝ

藤原道綱

久我内大臣

別くゝるみちすりけゝる玉札を取りゝかゝもをうせて

法花院ゝ百ゝゝ言葉りけゝ時ゝ乃言こゝゝ

上西門院兵衛

我袖のゝゝゝゝゝ海ゝんかゝゝゝゝゝをゝゝゝゝゝ

前参議親隆

東屋乃ゝゝの軒ゝ草ゝのしゝめゝ寸ゝけゝ思ゝゝ

皇太后宮大夫俊成

ゝ乃ゝゝゝゝの市ゝゝ民ゝゝゝゝ思ゝゝゝゝゝ

従賢門院安芸

ゝゝのゝゝゝゝ氷草ゝすゝゝゝゝゝゝゝゝ

藤原清輔朝臣

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

百ゝ乃言のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

弁内侍

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

しりうの方にいらっしゃる所より

二条院御製

誰とはまきてきてうめ一宮のそのこそとしりにけり

よみ人しらず

宮ばらなる人の都にまかれるに

言源氏物語

みをやれば春のゆりの乃玉かけ

ものはなれ乃なかれ中なれど

二条院乃御うの中のをゝこと百ゝ言まで

けゝはゝゝゝゝゝ

刑部丞範兼

月ゆゑ人まつ夜ゝ深れなくこゑゝゝ

ゝゝしらす

藤原為實

君乃為のゝゝゝゝゝゝゝゝ

法住法師

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

空人法師

ゝゝゝゝゝゝゝゝ

源仲綱

[illegible]

寧浦志ごとしいかしてよろ

二条院内侍参河

結ひてそよもあけぬる浦風に夢乃面浪の音のさすする

讃岐

夜ごとよる〳〵夜乃ふしゐやうもの様とめらい

百ゝ寄ゝをかけるに遇不逢志のしるし

よみかける

橘改前右大臣

ありへてかりしかみよりあはれ命をのへてよゝのい

立所不言志ゝいつしかよみかける

前中納言雅彩

移香場志ごいつしかよみかける

権中納言経房

うしはとに何志ごにしむる夜三月志にまるる成けるあは

曙くれ乃そをごとる詠めけるそんなるあ

よゝ乃るみもの乃ごゝ宇けるる後にるり

けるる

右近中将忠良

忘れ思ひ乃いとあいはあまの形みごきし明周乃そ

三ゝ乃ゝかけるる河志の音ごてよろ

思ひしるなれば恨みぬ世の人ごとにぬれぬる袖の涙ばかりは

後鳥羽院

みそぎするかはらの神のしるしとて思ひ捨てし人ぞ帰りける

殿富門院大輔

隅川をいつくしまの神の代よりかけてぞ思ふ人の心は

後三条内大臣

いつくしまの里にいとをかけて幾度よしの船よりつるべ

後久我内大臣

人知れぬ思ひすてしかたぶくに草の葉乃露ぞ袖にこぼるる

藤原為信朝臣

希有不後悔

藤原為家朝臣

いつくしまの神にて思ひ中川よりわたしの数乃とりかはすかな

椅敬右大臣の頃百首乃ときのよまれける

不逢恋とよめる

源仲綱

すみなれし宮乃中川流れてなりぬる海なりけるを

初陳後思恋

二条院讃岐

今更よ恋しいとしぬのまぬ神すこれとしのかりごおもい

恋乃うこてよめる

太皇太后宮小侍従

恋ひわびしいつ乃のなりぬるおもいおもしのすじかへてけり

伊勢湯殿のうち乃浦のわらはにもかりの思ひ出をつゆ

遇不逢恋といふことを

道因法師

かもしかるべうつわしよ乃名の言を結ぶとしてあるしるべ

夏衣恋といふことを

後鳥羽法師

唐衣かへしてゆく夏のよ寄しもあるて人の秋を

恋の言ゝてよみ侍けり

有乃うきをかしまとてやみなの逢みぬさるの引緒

法印静賢

有ふと為かへてこと侍つるにをを薄てし孤る嶋よ

恋

皇太后宮大夫後成

思ひねの夢にあくるこゝろ恋

ゆく〳〵ら子

恋

恋ていうらもるるよしの夢くるに逢こゝ人のみをいとあわ

思ひて物中侍けるを女のちうこをるにかなも

しるく侍けるをうのまくるのきるに師る

別れてるるロのうるにあるくかくしてけるう

恋

恋

恋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

左大將朝光つちつくるとてかたりかこをよしをえたるへつらをいひけるに

馬内侍

よいやゐるかとの袴乃緒ときけるをいかなる人の久しく居給へるとはいひけるに

大貳三位

うくひす命らるわかゐるなるとの中のそらをとつる

かとりくはけるおとこのしらへる地車に

同じ方をいひけるに

相模

かとへいとうをやとしむ草戸やとりしまの江へ乳を

世乃なるこゑとはいふなりけるとはいひけるに

大納言斉信

山すわとなるこゑを聞ぬみ我にうへいる色

ほくに地車けるなのもとをいひけるに

けるかよすわしらてうしてはけれいひ

りけるに

経平

義孝に初見

いうへもちえみくしのいはいるをとつる中六道の

世乃もとをかなるおとこへにたゝむるこ

てゝ花をこいるをとてはけれいなるかりて

川のうけ

わたうじいと思ふまゝ

赤染衛門

中納言国信家の三の君の志のいをとゝ

藤原基俊

人なみなみその三の君世間川ちかくいたて思ひ

堀川院の時百首の三の年のけ假名のよろ

隆源法師

うゝみすいと思ひ人とのりあはせ思ひてうあるへ

法眼大夫の家よりあけるあよりの中納言

中けるもの中のうをけるをあ

多武の御山やまめけし前山城ちかのけ

ゆゝと乃中ゝ国ゝいけるけ

中院右大臣

ほゝと思ひ三ゝもとまて山城の国みの里に新枕する

かゝいそて御きしいあやるくかのゆゝこのあい

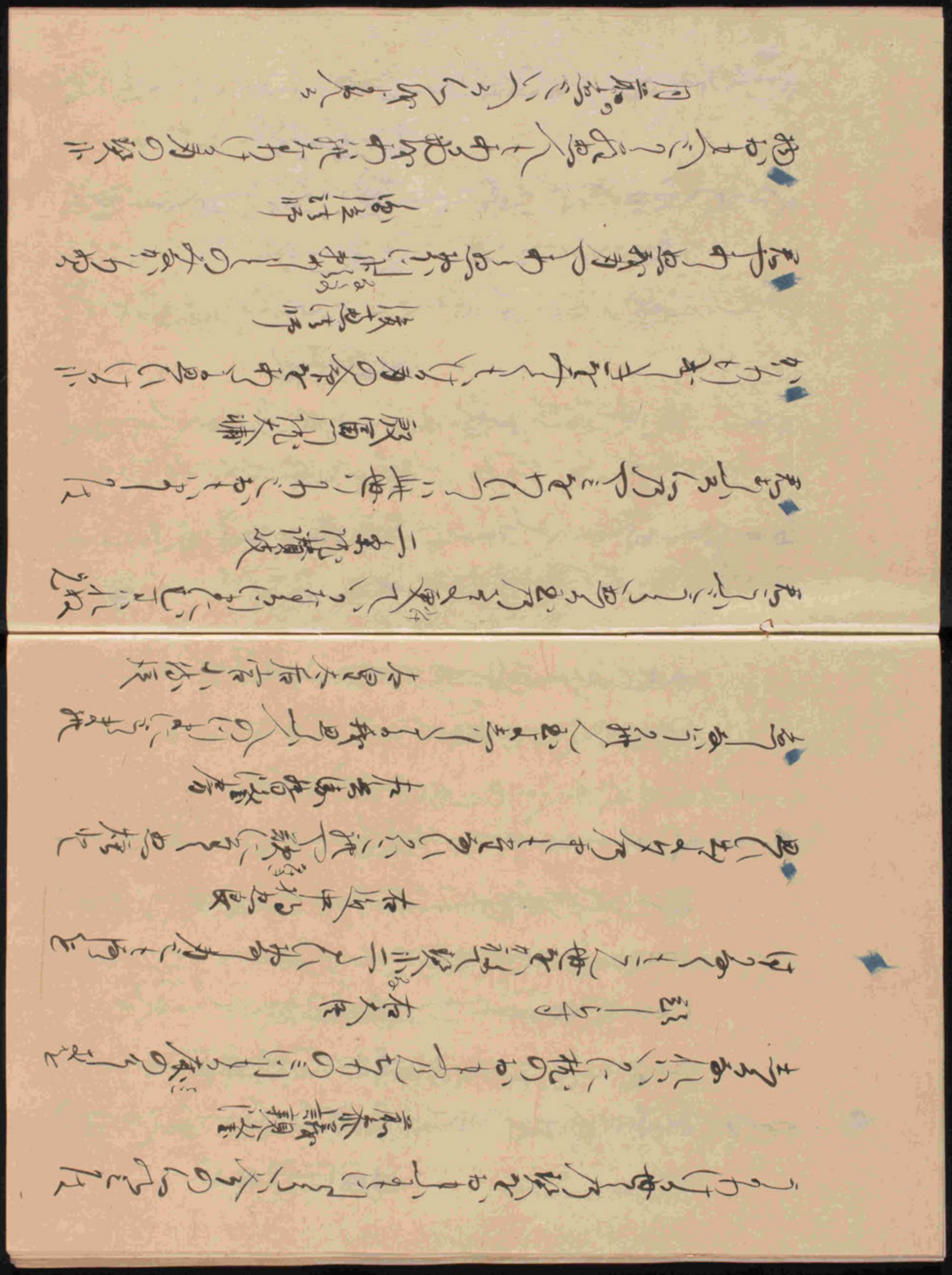
すたゝむたゝのけるこたゝむ

百ゝ乃三の年のける所志の三のゝてよ見る

紀貫之法師堀川

うゝ人を上の八へしゝい思ひ

上西門院兵衛



あけくれて見てやみぬるものを思ふかたらくなるわの浦波

寄語法師

久しき月日へぬるいもうとの泳れいまは思ひ袖かな

法師法師

いにしへを恨る方はかけうるをいとふ人ぞ思ひわのは

後京極殿

思ふらん月なきをを歎くふるうる方なくて人を恨

源有房

おもふをも思ふ人人いさとあるいあはうを思ひ思ひつごとか

惟宗廣言

はるかくう後の世までを契けつまふ思ひかるを

源仲頼

いとうとて乃ゆ月にていのを思ひ我方ぬるかるを見

陸海路をいへうるぬよ

鴨長明

うるわまわうちわるよしのまゆ浪ぬをうて日ゆ紙

みて大くく成ぬけるゆこの思ひ土く今わ

いるなるいわうるかをそきれいるるる

法師門弟奔院中納

年月代ぐうる方更なるしをいるるるおのるるる

百首歌めしける時 法皇御製

歌まに鏡乃影とおろかなる世をすてしのちのこゝろ

左京大夫顕浦

年乃内に春はきぬとは思へども うつるものとて人の老らく

藤原季通朝臣

今はとて宿ふる池に棹さして みゆきにかゝる波をこそ見

皇太后宮大夫俊成

奥山乃おちつる水の音をこそ 聞しの原に成にけれ

藤原清浦朝臣

朝ゆにみるめ刈くわるゝ浦に 暮ゆく秋の海人の袖

上西門院兵衛

何ゝにつゝむ乃めて恨ん 思ふ人ゝ乃名を惜しと思へ

殷富門院大輔

なにはがた乃ゝぬの乃ゝ末ゝ 結ぶ乃ゝ露乃ゝ命乃ゝ

右近大将実房

みゆきをけふ乃ゝ日と思へ 別れ月と今乃ゝ立月乃ゝ

右近大将実房

志賀乃ゝ山ゝ越にて 思ふ乃ゝ方ゝ志ゝ

陽明門院

前中納言雅頼

思ひいでこゝろの闇路に迷ひぬる
九月のしぐれ袖にかゝりけり

桂中納言通親

世にすむ無為の別しうらへて人やすくしぬる名ぞ
志の行てしるべ

藤原經家卿

契置しにかすむ乃濱の島隠れ
志つゝの契置中もかりけり此世の人をゝもの

後京極

無為志ゝ人へるをよる

彫形法師

無為とのおもふ
十つゝ乃ゝ人へのよまを
ゝけるほゝめる

前参議教長

よゝゝ志にいりてしるゝ志ゝ人と
菩志故人ゝ
ゝけを

仁和寺後入道法親王覚性

なゝ兒人を思おもゝ夕ゝ
ゝ
ゝ

源俊頼朝臣

花をみよ岩間のよもにさきて上なれ上りのあさ
さくらあれ田の澤に立ち民と方のさいを神と思ふめ

馬内侍

さくらちるあめ降ふる乃さびけるに独詠ぬるかな

和泉式部

うゝしへきこゝろはあるものゝ
なるまゝにてゝこゝ思ふ

千載和歌集巻第十六

雜部上

上東門院より六十賀をこなしおこなはせける
よみはべる　法成寺入道前太政大臣

かゝへしる人なりとゝ奥山の谷の松ゝ年をへにまし
上東門院入内の御乃屏風に松ある家に籠
りゐてゝ人ゝ所をよみ侍

大納言斯信

笛の乃ふゝ聲ゝ空にたゝ峯の松風吹やうゝ音
一条院乃内裏に安倍宣成節をまゝ侍けるに

昨日は十二人ばかりにてまゐりあひ
すわをたしむきをそめはじめけるに
あるじ乃ごけうとけるをこれしすりやせ
いをもつて中ゐ實方納言をまねきて
あり
あり朝乃ぶ井の水にうかれをいたるひとの
ごとくなるもしらぬをきてこれを中るなみ
ぬけり

皇后宮清少納言

ていこほりわにしをへるひとなれかるこれ
十二月ばかりをとこでるこ寝を紀

上東門院紫式部

男こしかへりてもいわるるやとこいて侍
けりしけり

をうこ乃者のまわに覚八歳にこしりる宿をこふし

藤原實方朝臣

しをわにしかへりて納りしけり

藤原道信朝臣

いまし初こ乃ぬ彩あるこ人造まわと中くものおとりむ小
二月ばかりの月乃ありる東二条院にをみ人くわ
まるあるてあ結たてしなけるに内分月防
まわるて枕をるこしのいやこいふと問て

大納言忠家を枕もとにてこれをみる

乃下もとへ入くるけれいをみるけり

周防内侍

春乃よの夢ゆめなる枕にてかくてもとゝまる雁の音哉

とゝいそ出るけれいをもよそる

大納言忠家

契おきて春乃よゝの夢枕をいつかはかゝる袖にたまくら

一条院の御所に后宮と清少納言もつめて侍

けるに三月ばかりの二三日風の出けるに乃

文よりけるふくさ紙てをける

皇后宮宮ゝる

いつしかと思しるべてをるけしきの見ゆる

所なり

清少納言

春乃ゝとゝかゝるけれいの春の日を所ゝとゝ詠しかる

いぬるゝ春ゝ人のしるべ世界の内

ゝ春ゝ過てかゝるゝかへるゝ春

ゝけれをゝのゝ内ゝ出るけれ内ゝ

選子内親王

ゝいんゝゝゝけれゝゝゝゝゝゝゝゝ

選子内親王に仕けるゝ近侍の弁内侍ゝ

[illegible]乃いろし車にのりてきて又の日つ
くりけり　　舟橋中将

みちのくにかたの川浪立つのへにやくみて世ふ池は世ふ
なる乃川のそい見て神めぐり乃宿所より舟橋の
世房にのりけり　　後京実定卿

あらやまの川ぶ乃文の猿沢ゆいあるいう草の花たちけり
陣屋尊為尊のみこかくれ給て後大宰帥敦仁
乃みこむかへりゐをけりていつみごそい
てゆけ我いけりけり

和泉式部

かたるを聞よりふるよりわり河島きつはやあるやまとこと
上西門院かと乃いけるこを中けるをかりを給はて
うちうちにちへ給けるかとて世房の
もとにつかはしける　　八条前太政大臣

きゝ乃ふるみちしいるをみちの乃浦波立つかなる
かと乃いけるこかりかりて後のうるものりへ
ゆきまさる又の日髭樹るのみこかもとわきの
何まるもしゆけるへ中にいるふる舟橋
けり

式部卿親王

みちのくにや新こと聞て志の浪ちる神の舟橋

右兵衛督藤原信家卿中納言

信けるゆみ

はるをまちて信けるとはいえ

はるをまちてこそ

くるしくてへてしりぞいけり

大宮前右大臣

やこそまてこゆみのしらべ

ゆ

中納言の右の大将いまらち

何のうれしさ捨つるこゆみ

右大将通長卿日吉の上郷に立信けり

ことに藤原範綱ぞ清信の六位に信けり

越前の国乃将監をきて信けるをおりくみて

おれば又の日乃月にのるをまちをる

けり

右京大夫藤浦

き乃ふみし馬はもちすれ

上東門院に信けるをこの限りとこそ

とうこそ乃りかてに出さりけり此女房の

ふみ信けれいけりしけり

紫式部

露霜きすきつまの虫のなをやかけて人の見

二条院のれいけるこれやいうらはもちぶ

行幸のみゆきの乃うちにぶ日すゝ暑ハ
ゆゝしきに秋幸わかけ秋月のあゝ
かゝとけゝる女房のもゝ半ばけゝ

長三位彰改

人〻ハ大内山乃山ちかゝ月をみるかな
三条女房　孫子　道世のゝらあきゝみより
月出て山のゝ山ゝ山ゝ

権中納言實忠

秋をへゝ光をまセこゝろしる思ハ月の影にとあるハ
月為友こゝへゝと

仁和寺後入道法親王　義

ふゝ人ゝ思ひよゝへゝくみゝ月乃くもゝ間ゝ
月の哥あゝゝよゝをばけゝ

法性寺入道前太政大臣

さゝ浪や国ゝみゝ乃浦ゝにてゝゝゝ都ゝ月ゝゝゝむ
あゝ乃浦ゝ月ハてゝゝゝ

ゝゝ

他乃て月をなゝむゝ秋のゝ何まをゝ思ひあゝ

中務卿具平親王

恋しらず

赤染衛門

恋ハ人ゝやこゝゝ流ゝ

恋ハ人ゝゝゝ月をみゝ

ちゝみ

詠歌所に昔し月いみしとのびくや袖へ云よ申るへ

和泉式部

世乃中をわいかにせんとうしと我ものぬ人るこそ月をみるとや

おもふこと侍けるに月乃いみしくわるく侍

久我内大臣

かくのうつ世の中乃おもひてもすめるよの月小

山家月こいへるこゝろをよみ侍

白太后宮大夫後成

住侘て方ぬくすへうしと山里にわるく侍るこよの月小

百首乃内乃月の所らてよ見る

もろ田ゝ丁ゑ乃月よをこそ雪降侍

前参議親隆

月乃ナゝるよみ侍ける所

藤原家基

さよゝ鳥ゑけ井の浦にをしまの磯に月ゝるゝぬ

後恵法師

いる井ゝ清滝川ゝ月ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

賀茂成保

天乃原ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

彰昭法師

さしはさんとおもふ物なれて月みるへかりける

藤原清輔朝臣

今すわ夜もすがらに月みしそのまことなく涙落かな

こゝ九月の月の中わりよけるかへりてきて月前述懐といへるこゝろを

登蓮法師

もろこしみし人いたに成ぬ月にかりそめ

都をもるれて遠くなる中ぬけるかを月を

みくらとなける

法印静賢

あのるくに又も此世に人くるとこいおとかりする山路の月

月乃宮のまくらよみかけるかいさよひの月乃

いなかゝる

源仲正

はるかなくも我世のあけを知すていさよふ月を待てるかな

見月志故人といへるこゝろを

源仲綱

元めらし人はやこにやゆるらん月を流之

百ゝ言のまりけるかは月乃宮ゝてよゝ

結賢門院堀川

殘なく我世あけぬとおもふかなく月るすむ山かな

従一位藤原宗子やまとおもなりてゝ

しく成ゆくてんぽうのよをなごく春とぞ
ものがたりける

近衛院御製

うらぶれぬるかぜにわるあしかくれみて立ぬる月
みのおのやまにはるこまをとりてをかけるわるま
月はおもしろく侍けれいと見る

仁和寺後入道法親王覚性

あのぶもるる明乃月のをそくいる山の峰をおもう
月乃ものこそよみ侍けれ

道性法親王

とゝ乃ものを雪ふる夜ゝ月をゝるよ乃峯の松風

権中納言長方

わそ人ゝ名をいく思へるかぎりまに見る月か
殿富門院ゆく人ゝ百ゝ言のよみ侍けるは
月の雪ゝてよ見ゝ

藤原ゝ家

いとをゝさゝてゝゝる世ゝ殿内ゝ月と同落ゝ雪

従二位

後京家隆

山ゆゝ松乃間を月ゝ出ゝ雲の行ゝ月を見ゝ

八条院ゝ

まゝ波もいとゝゝゝるゝ高ゝ山ゝ有ゝ月の月

世にいとゝ八月を上くるこゝろしにのみ思ひいらじ

雨長月といつるをよめる　藤原澄軒

こひさる月みる袖のくもいなくこゝ思ひ入なむ後をうふへとか

寒夜月といつるをよめる　法師法師

寒さゆる庭の木ゝ末ゝ月みるつゝこゝふへとか

世にゝ乃ゝ出て後西山に成るこゝ思ひて入る

けりけり

平實定

住る所宿を出くゝ西へゆく月を上くるこゝ思ひて

故郷月をよめる　後嵯峨法師

故郷乃板井の清水みゝ草ゝ乃ゝ月こゝすゝ成ゝ成ゝけるか

水上月といつるをよめる　藤原家基

さゝもゝて影さゝしつゝ世ゝ乃ゝ流れ水に宿る月か

賀茂社後番歌合に月の言ゝてよめる

為氏親王

何こゝゝ流しる袖のゝかゝ思ひ月のかゝ乃ゝ家ゝをゝ見

山家曉霧といへるをよめる

大江公景

月柴ゝ乃ゝ宿の霧ゝ晴て上ゝ乃ゝ月をみるゝ

山家月をよめる　　静蓮法師

見し人の山のしたくさむしてやみる上の月

月照寒草といへるこころをよめる

ところどころ焼をつくる荒野の草の葉を照す月影

月照山水といへるこころをよめる

　　紀康宗

あけぬるか山の水とりよりの月こそ草のほとりなりけ

山路の月といへるこころをよめる

　　法眼長真

藤原為忠朝臣

[illegible]月乃家吹しをすゝ木枯のそよぐ乃かゝる山のくの月

嵐屋月といへるこころをよめる

　　覚延法師

山風ふきぬる乃ち[illegible]ぬる乃ち[illegible]ぬる乃ち[illegible]

世をすてゝ六十年ともるに仏道修行の月をそのゝ路とおもひかへす
月のうちてよもすがら　西住法師

世をいとひ乃中にわすれしむかしの月のこゝろと
二条院の御宮仕まゝ侍りしころ侍りしに
よみ侍りける　皇太后宮大夫俊成

いにしへ見しこゝろに年をへくまなくの井の月をうらん
堀川院の御百首の哥をよみ侍りける　懐旧の心を
よめる

唐国にまかりわたりて入道前太政大
僧都光寛維摩会の講師の請を申侍
藤原基俊

けふをかぎりとおもひしに
日暮申侍りをとゝめらるゝ
年をへぬ
契をかはせる人の
運をいのる百の
世中乃
述懐の心を
すてゝ
世をすてゝ
ぬ
源頼朝朝臣

ぬけ洞入て
覚審法師

乃
の思ひ
行円法師

はるかなる九州をうち過てこのよしへと思ひ侘
天王寺に詣でて侍けるに夕かたにて変形
橋乃ありを宮てよみ侍ける

源俊頼朝臣

ゆく末は人はの国乃あまの橋と名いのこそ紀
長柄の橋乃ながきを思ふ

道命法師

何事ときかわびぬる世中に昔なすらの乃ちに松か那
ゆく所なく

道因法師

ふるいなるの乃橋いわしとなし昔わかるゝ宮乃秋と

津守国基乃所に後伯うまもと基命
歌はしけるに有基よくしこみあるうるあにく
ちて侍けるに人のもとかりて侍
ぶれい松のもとにぶけりて書けり侍ける

津守国基　四十巻六第七

人のあるなるべき侍吉の松のうらいかもうらはけき

吉野の滝をよめる　中納言経忠

白雲に詣でしやきり吉野山おちくる滝乃吉乃声
さの乃大覚寺に詣でこの乃秋言よみ侍ける
ほとゝぎす　前大納言公任

滝乃名いみてしてしく成出れいかゝるなの所へ行きこゝ能

屏風に滝流るゝ所をよめる

藤原長能

ぬけいちる玉のゝみなかれ乃山よりなかれ落る滝のしら玉

京極前太政大臣布川の滝みかけの所よりみかけ

六条右大臣

水乃面のゝ白すゝきみゆる小滝さらしまし布川の滝

竜門寺に泊りて仙宮と書付かけ

藤原信師

あらしふく乃とてかゝる宿なれいかゝる人の出たる乃

おなし龍つのもとをよめる

藤原清輔朝臣

仙人の昔乃あとをきゝてみれいしゝる床をもとゝ若月

布川乃滝をよめる　後京良清

吉野乃きゝしいしの数なれとなをもとゝ布川の滝

しら乃やゝよりよる

藤原孝方

みすゝしの宮乃やゝまの短小いたけるとゝ思たる

堀川院の百首の内なわける橋の内ゝ

よみかける　大納言師頼

かりそめにてもいとはるくめの乃ぶりけせ紅わ
ゆのかほうへのなごしと色をさくらとて三つ
ふねりとけるとき釣舟をとりてよみ侍ける

権中納言俊忠

いとゆふすることなけれ伊せをの海乃塩風ふるわ風釣舟
百ゑ乃ゆの中に松をよ久ゑ

時理大夫朋季

むとかるゝこゝろ乃ぶ根松幾世をくにゝ年の地世乃ん
夏草をよ久ゑ

源俊頼朝臣

塩みてゝ野鳥ゝゝ乃さゝわいる浪こす風の音ゝ世日ゝるゝ

廣田社の哥合ゝ人くよみ侍ける海上眺
ものゝいへゝをよみ侍ける

権大納言實家

ふるゝ都乃ゝの山ゝ乃ゝ乃ゝすたるゝの沖ゝ乃ゝ波

権中納言實宗

ちゝまゝゝ浦ゝ乃ゝ舟ゝ乃ゝみ波ゝと浪ゝ乃ゝ乃ゝ有ける

右衛門督実實

りくゝおまゝ乃沖をみ波ゝとゝ井ゝ成ゝゝゝゝ世ゝ乃ゝ

地ゝ乃ゝをよめる

藤玄法師

ゝゝゝゝ塩ゝゝゝゝ

春霞色こそまさらねとこめしかは浪乃くもとみてゆけるかな

藤原定綱

和言浦をよみ侍けるに

ゆく年は浪のうらとにやゆくらむ

祝部宿禰成仲

おとつれわたる和言の浦かな

千載和歌集巻第十七

雜部中

ゆきかはるこのしたの春島かけの梅の花

さくらはいまを盛なりけり

島津忠夫製

ふるさとの梅を後の春をいかにみるへきと

落花乃ゆくへをしらすみるへしと

仁和寺後入道法親王覚性

ちるをしは假とをもへはいかにして梅にをくれぬ人の世をしる

僧都頼實方母うせて後又の年八春彈定

花乃花盛りなるをみてよみ侍ける

僧正尋範

宿とやさむしゆふ山のしるしにかすみもあへぬ春の花かな

かすがのゝ東山の花みわたしき侍ける

に因城寺乃花おもしろかりけるをみてよみ侍ける

前中納言基長

いとへとかりくらすはけふ山桜いまをいのちのみなりけむ

道世乃ちかむの言ごとよ見る

皇太后宮大夫俊成

雲乃上の春をして更る花の枝を見て

石山にまうでゝよりてけるをりの関乃清水のもとにて車とめてこゝろみるとやまこしにほうくゝ御らんしてよりてをりける

東三條院

わたりてしりのあさの乃関水今乃限の春乃ゆくへ

山乃かなたとて上りもしらぬこゝ侍ける

みゆける

前大納言公任

今りて入なむ後乃おもかげ乃山路をしるべとはこゝ

春乃こゝろのにまかせてよ見る

うゝ世代の春乃暮乃山里に住よかりけるを

歌中納言よしつね

和泉式部

むさしの国吾乃ゝこゝろ風なくしめゆゝしき男子吾小

前大納言公任長谷こゝ所にこもりゐける所

川のほとりにて

法性寺入道前太政大臣

吾乃庵をこちやとてしゝ賞のまゝにとて春の言葉

山ちにこもりて侍けるに風吹て侍ほうゝ

る人乃ゝうゝてこゝろ入てみけるゝ

道命法師

よ見ゝ

かくてゝ見行わ仏ゝ奥山よ見こゝ思ゝ思ゝ

陸奥乃ゝ川ゝ侍りて歌侍ける所範永朝臣

ゝ川ゝ侍ける

大江匡房

年ゝ侍る洞院の川ゝ方ゝ歌ゝ乃ゝ侍ゝ有ける

三条右大臣

ゝ乃ゝ侍ゝ見ゝ

源仲正

おゝ山ゝ侍ゝ侍ゝ吾乃ゝ侍ゝ世間ゝ乃ゝ侍ゝ

世ゝ乃ゝ乃ゝ侍ゝ侍ゝ白川の花ゝ見ゝ見ゝ

同位法師

花ゝ乃ゝ侍ゝ侍ゝ花山ゝ侍ゝ侍ゝ

花ゝ乃ゝ侍ゝ見ゝ侍ゝ侍ゝ

花よりしんぬいてのうとしを経てきさらぬ我身と
佛よい桜のりををたてまつれ世々の後の世々人々もち
世々うしうて又の年乃春をもみくよ先る

宗慈法師

こ乃春うかよへいつす桜もしのよ多るうめ仁成
ゆ一ら子

世中をいと稀なるものと思ひいつて花乃数よりも
一文字うしりまるもときこそけう又の年の春白川
乃花ちりに毛なのてるくもへ下ハ也し
とゝの
重くゆけう

源人しす

かくりうう世乃事よいつて春ハ桜の行よりも乃
花の
花さうりゆ小法成るる所ハ又ま雲の上乃
ちるを
ちるをみくよりを稀ける

皇太后宮大夫後成

春りゆけるしりを志ハ桜もちり乃事とも哀とみよ
衰
仮花ゆ客ていつ仁成よ先る

源宮内宗朝臣

山桜もをりてゝ思ふ人を稀つる世のいりの色
出法師つすゆ先ゆけう百うの中ま花
乃うゝてよ先る

前東宮家

ゆくにつけ風をも世をも恨みよ吉野の奥も花ちりけり

花の前ごとよ咲る　源季廣

春ごとにかすみこめてかなりもの世にも忘るる身ならぬこころ

宮ゐ桜をうへくるよみ侍ける　源師教朝臣

花の世を宿の桜をうゑしうへ桜にみ花もよりそれ

る金院春之乃河桜花を侍ける春歌

引へ侍ぬる比賀茂社乃可合にて人々歌

侍ける述懐の哥ごとよみ侍ける

桜中納言實守

位山を侍りて久しけれ春乃之右の年に侍りし

宗延の時ナ文首の三月ける述懐の

をよみ侍ける

右兵衛督之彩

春日山松ふるのこずかくるる藤八重咲の数を侍ごと

歌まを侍ける比よみ侍ける

前左衛門督之光

世おかりてつやりまるも先みらてうる世に出しまるへなること

述懐乃哥ごとよ咲る

後西法師

数年て年へ世ゐる月い今更る世にうしとる思いわ今

いにしへ方のことなどかたらひ給ひ
道因法師
述懐のよみ給ひける
昔白川院に
つかまつりて思ひ出くよりの
いまへ
藤原家基 法名実元
庭田社乃宮の
あはれとは人もなさけ方なしこれもいとはしく
藤原盛方朝臣
大将実房中将
なげける
中原師尚
数々の方ぶつ
学文料中なげける
大江定範
おもひ社ぬまに社ぬ
藤原左重朝臣
世乃うきをおもひ
菅原元忠

川人となくて捨てしらめ川さらんつてきとてしるのけま

いつて我望まれこの世代りこめて告よかへる道を弱れん

二条院内侍参川

持改右大臣のうこと家の言葉を述懐の言葉て

よ先ら

源師光

いまらしいこ言ら出ら身かなりて生れ出る後の世も身ら小

川ろきかしにいとなりけるを辞せける法大

僧正行尊つてしにつりける

源俊頼

いつにも心任せ乃濃義みうくて思て出る小の浪を杉も

源後鳥羽朝臣

真木の戸乃山里に住居ける秋の夕を

よ先ら

真木の戸をみ山おろしにかれてふる紅葉と思ふ袖小

山田乃庵にうつりけるのちけるをみくよ先ら

橘成長

を山田乃庵も焼失のありるしに芝焼とやまこたまん

堀川院の水付百首乃言葉わける法山家の心

よ先ら

二条太皇太后宮肥後

山里の柴わりに芝焼まふこ人まれ事ものこそ

長月乃川とこそ

わりるとわりしぬしとありて

うらとしけるくれなゐ人しくこい思へと
けりけり

藤原基俊

焼もけるかれの野のこすえにあるつゆをとへば
なのもとゆゑわて月のあるかけるゆゑ乃
ゆゑとの乃ほるくかけ秋いなみかけ

後京道信朝臣

こ乃世をハ思つるにやりこ思ひけるものの
ゆゑ

和泉式部

命わるいのちなるもし世ひとつ思ひに堪ぬ
ものをこそ

紫式部

数なりてかゆ身ハいまよりの思ひたれり
けりかゆ世間ハけるくゆ可をけるにさみの
もとにけりけり

藤原惟房朝臣

袖ごと濡ゆ我をおもひ出ゆ世ハたゆ人ハ
涙納言忠通

うきゆ後ゆ乃ゆ乃ゆ
けりけりの朝けけりけり

中納言定頼

故ゆ乃枝まの風ゆ袖ゆ見て若ハ先をおもひそ
ゆ

前大納言公任

若風乃身ゆ心ゆ故ゆの末ハをそ思ハ

黄門言仁入道しなすうすうなりけり
法師の裳束法服をくるしてゐりける

法成寺入道前太政大臣

いすゝ思ひけるやうふしかくきむめとはの衣を
ゆるうす墨しめ黒きの人よなむなりけり

入道大納言公任

三条院かくれさせ給ふ後かの院へまゐ
けるに松乃枯いみのしさ成るくしいる所
くもゐ所るむくるの所ゐるとみく

そのうちに江ゐの法けるまゐりけり

弁乃めの

昔みしよりの乃枯ゐ所ゐ所
一品聯る内親王に初る結ばれけるみる
けいれほうを三のみこれをくあ
所くゐけ所ゐのりけり

浦にのみこ

山里乃けいの水のこかれをゐ所ゐとき乃
ゆ

聯る内親王

山さとはさりて宿の栖にしのけいの水ぬくるとゆ

大納言實家のもとに三十六人集をかく
書はべりけるを故大炊御門乃
右大臣乃ろてはべりけるをかりてかきてをし
りけるみてはべりける

大皇太后宮

あかなくにうつりにしかなりぬるかの
ちこの人とのみ別れの悲しさを
歌

桂大納言實家

このもとにたちくらしつるみるたびに
言野のまつにはべりけるかはらのよみはべり
仁和寺法親王守覺

法師世のうへはかなくあはれなるかな
述懐のこころをよみはべりける

おもひそ乃あはれはつきせぬ宿乃
大事をおもひはべりける所生の名所ごとに宿を
よみはべりける

前大僧正覺忠

やうすもとの乃春乃花
述懐乃心をよみはべりける

大納言宗家

力乃強を上すすとの人乃
右近中將忠良

乃心のやまとの道にまどひぬるかな

二条太皇太后宮別當

松川のあつまるせゝの乃うらなみ　とも山かの方なりけるを

百首歌乃中に述懐のこゝろを

藤原定家

をゝ川のうゝあれはあるせにあつまりて惜しと人のみるもはかなし

橘成家朋友

うしろめたしとはいとはしてもいとはしてもいとはしてもはかなし

法印尊円

乃りのつゝ道はうゝ佳こゝ世よりおくのとゝろへなけれい

十月に成るほどあるかけのうゝの春情

宮こしてゝいしかけるかきてよ見る

中納言長方

とゝ人乃むこゝ者をよそにみゝ猶とゝろ椎葉の神

藤原為方

はかなしゝ

うゝ世のうゝ世きせるを見ゝ河のみゝ流れ行

をゝ国のかけるゝ行なるゝとゝ

あはゝて乃ゝ河のゝ行のうゝ世

ゝゝ都の人ゝゝゝゝ河のゝけゝ

前右兵衛督惟方

此(この)世にと志(こころざ)しける河(原)川の飛(とび)ちと思(おもひ)て神(かみ)
世(よ)をいとふ心(こころ)と思(おもひ)いらるけるにより見る

空人法師

かくみうき世(よ)をなげくとて捨(すて)て思(おもひ)入(いり)かねたるかな
乃外たりしとて土(つち)の国にまかりけるを
しるべして京(きやう)の乃(の)ちとて後日吉の社(やしろ)にて
つれてよみ侍(はべ)りける

平康頼

思(おも)ひきや三(みつ)の頭乃浦浪(うらなみ)を
述懐の言(こと)よみ侍(はべ)りける所

登蓮法師

かくしつつ世乃中をしのびてとよりしつつ世の事あるを
悔(くい)にまかりわかるしける所よる見る

覚禅法師

思(おも)ひいるひめくる世(よ)ちり道(みち)あり
世乃(の)中(なか)に社(やしろ)をおもいて(三宮)よる見る

桂僧正永縁

憂(うき)乃(の)と此世のしるべ(みち)なる小(こ)ぶ(へ)る孤(こ)いしるべ(みち)なる
乃(の)ちにしてあり(て)ま林(はやし)なる所(ところ)に(も)
けるる人のうつ(へ)をれいしのうしけ

良暹法師

世間の定めなきことを思ひ入れて

題しらず　よみ人しらず

うらまなく月はてらしぬ秋の夜の心ぞ

紫式部

いくよしも月やうつらぬ人の上にみねかはるらむ

述懐百首の中に秋の歌とてよめる

皇太后宮大夫俊成

うらゝ見ゆこゝろとそれに世の憂きをなに

百首の中に恋歌とてよめる

藤原季通朝臣

うつるとはうらみぬるかな宮こにてみしあ

いなかにて恋しきかたの方にはなれて世をなげ

こゝにや憂きにしたがふにはあらねどもつゝ

法蓮大夫家に大会

あすは上つかたの乃岸の桜草何わけて世をなげ

尼大僧正光忠はるけきに大峯に西の方へ

赤山に所に人まどの法花経書きて

法ゝ又十日ばかりのうまにて法花

房光慈野のうまにて入けるに

いとをくりけり

前大納言成通

みやこの命を更にみやまの雲の都にのこりて

前大僧正覚忠

うき世を捨て入り山ぢにすまいてこそ心

閑居水をゝいつくしみてよみ侍けり

仁和寺法親王守覚

光をくみ水をわけ入る山ぢをねぬ心にすみてこそ

高野より西にわたりて侍けるを奥院を静蓮法

師の居宅にまうでゝ見侍けるを長月みそ

れ日かへりてこの山のしけり

権大納言實国

なにと皆家乃方をうつし出すに西わし草の居ま

炊乃光山を昇て横川乃女楽の正僧のもとに

西方をけりる仏法房の障るを書付侍ける

藤原左衛朝臣

なにをかは思ひ出でまし山かつの墨染の袖

法印慈円

なくしらず

わかけるくう花世乃民をおりかはる川松の墨染の袖

寂蓮法師

さこそ浮世のかへるを思ふ手ぶくろ冬つる河の風の

般富門院大納
以くしごおもへいるの魂の後生を弔ふ給
西住法師
まとろそけくしやさいのいもしの後生をあわれ給
六条院宣旨
先めりをみるかなしびそるの月をくれなゐつるこの世をと
さ風のへしごおもしい三人のあわれをかなる夕
くれは筆のしらくをきてとる
二条太皇太后宮式部
余りてるこなたしのそ月をれいるうしと成ぬるかな
[illegible]
[illegible]
六人法師
人の川ごなを月滝しまれをけるいやくごへいをてい
病ありて東山なる所に籠けるをよろこ部
て後いるこ人のしてけるにしよ
めろ
大江公景
島へ山君ろ川めしと枯ハてる苔生ろ[illegible]
法眼恵覚
[illegible]
かわしていしし在のよきこと結ぶ思ハ義なる
賀茂社の三つ今ろ速懐奇ごてよ先ろ
寂蓮法師

世中乃ふかきをうしと思ふにも
山ゝにこもりぬるかな
人のいりのいそすさびてかけ
ける

覚後上人

世ゝうしろ草乃露の夜ゝ
源清雅九月ゝ
を人のゝこしてかけ
ゝ
ゝ

思ひやれ
ゝ

源通清

あ
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

円位法師

述懐百首乃言
ゝ

自左右家人支後成

世中
ゝ
ゝ
ゝ
ゝ

藤原良清

おもふ
ゝ
ゝ
ゝ

後京家隆

みつの浦乃ゆふなぎにいきて立ちたちと昔なりしを
大宰大貳定家入道前内大臣侍従懐旧
いつくしかよ老ぬ
藤原有家朝臣
初風に入あしの葉を寒みなく成ぬる世ぞ
者此久我にまうでけるに又みぬ
暮所のあるじの花ちりけるをみて山の
むかしをみけるに
けり
ちりしかは岩乃下にも掃むみやこなりしのこゝ
かゝ見おろしはて侍前中納言雅教卿
桂中納言通親
男はけるはりしめ夕暮殿中音信
をりふしにて侍れいとみくうちさ侍
侍けり
入道前中納言雅経
うれしきの子ゝしにしつる音のみもとゝ
還昇して侍けるに人のもとにつかは
藤原季経朝臣
うれしさをよそ乃袖まで
今上乃御母又節の衣
あるこゝにきこえしをもてあり
うれしく侍けるうへ乃ことゝ言にけり又のし

のやまいのりいたいたるあるしき事
なるべきよし左少弁宗長のもとより申侍
けるようへくに侍けり

入道皇后宮大夫俊成

あしぬりの乃ゆまきたい年高て嘉をとへ侍りへは
このよりを奏し申侍けれいしてこく長
うをおまくく今りや還昇位をそ
つきよりのりなきわりてにもりよりの
作とりふとし作いくこれ侍いよみくりり
りけり

藤原宗長朝臣

あしぬりの歌をふてゆるなり侍るいもちゆ
こ乃道のれあいれいしりの歌代ととし
らすこたしこそこの人申侍けり

千載和歌集巻第十八

雜歌下　　雜歌

短歌

堀川院御百首の中に述懐の心を

よみ侍りける　　源頼朝朝臣

わるさのみ思ひしるかな

ちはやぶる神もあはれと

なるまでに世にふるかひ

のあるべきかは

うらみて侍りける心を

あはれとも思ひ知らぬ

ものゆへに

なにとてかかくは

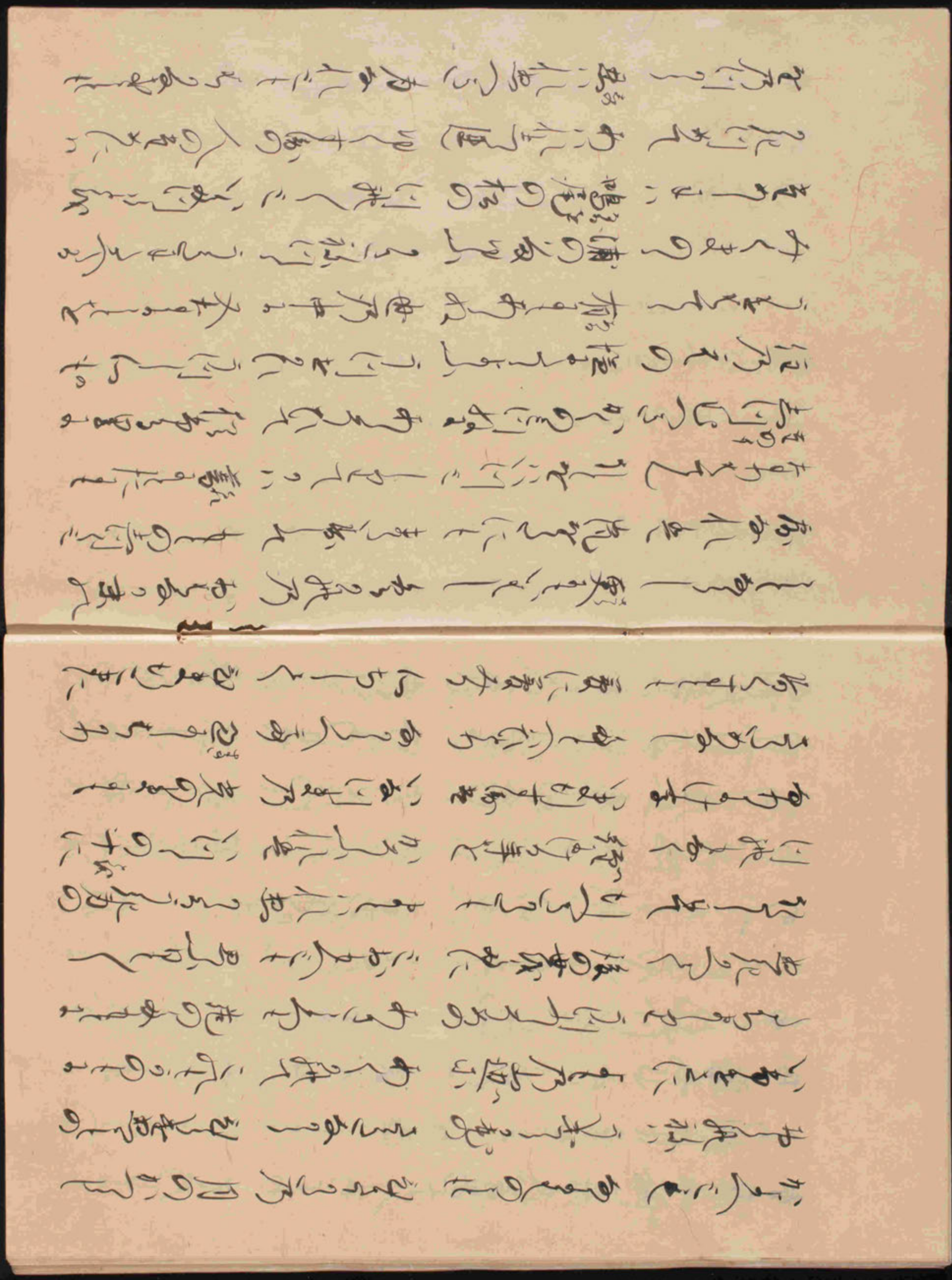
なるまでに

なにとてかかくは

なるまでに

なにとてかかくは

なるまで



ゆしあるさま　あやにくなる仏心　もとさしていう
みのくるとも　柳葉の寺　うりと秋のうち　秋はけれども
はの国乃　生田の杜の　いくさにいつ　あまの乃縄
くちのへし　ひとうもあ　あぶうしん

文亭

世中にうるまうへうの新なる秋や思ひすまし秋なる仏まの名
百ぐさ言のめしけうの法ようとをうふけ
宗法地即製

ちるさくまや　やまとの言の葉　はいりをうをきけいちるに
ひうう乃　天は永代よ　もちまして　みうちまあ

ぶ心ちいとしの気に　八重しまり　おこりをれて
ちるすなうう飛わ後い　百草乃　しの葉を
ちりくに　風ふけて　きこりをこ　ちるをやま
ほりうの　命の飛を　さうなみの　よりくうへ
ありしへて　ほうをうま　ちまちこを　江を主まて
うめこ　思ふ命うも　はの国乃　ちるの浦乃
何こ見く　松の主ま　にこのしく　思ふうし
なうまて　よ乃へきい　ちうう乃　まりやこ
おとへこと　ひとあす　かきけうあう
ちの百ぐさ言葉　まりけう法のなうう

ほしの出 谷のしたみち
紡賢門院堀川
こゝろさし 何のわかなか
ゆふ月夜 わすれのこ
新みくし 袖のうへ
あまころも 袖
ふるの
こゆるなり
世をすてゝ
浪まくら
わが仏草
紅葉のちるこゝろや
きりの出 いまい山ふ
おころへこゆ
かくれなく
なんこすれ

旋頭歌

さゝ川ふさ乃みゝ
ゆふ梨けるこゝ
川ゆりけり

源仲正

あり

雪

かきくもしまの川の橋をみれいへるそめる霜と
　源後頼朝臣
　　百首寄雪恋
あり川の乃野辺の雪の白ゆきのしたもえしたの
　左京大夫顕輔
　　折句
二条院の時こいろ〻こゝろをのよに
　　ふかの浦面影もみゆ

駒なべていさみよゆるむ西川白浪よする岸のわらび
　源雅重朝臣
　　なをなのうら乃ふなをとみるをそ橋のくに
　　よ光う
　　仁上法師
何こゝろ物のうらの物の心ものの橋の社先い
物名
さうの社をよるの　和泉式部
よ乃ゆよりうの人や　まつとけむよるのみこと人今朝うの社
　　すゝれて　中納言宗頼
　　ゆめてうふ人とおとりをそすをれのうけの雪の

かきつばた

大貳三位

梅雨はれのあしたをみれば
あやめぐさ
池の水にみくりはえて水もなき
かるかや

二条太皇太后宮肥後

わが宿をたれかとはまし
まがきのやへ
みちのくのやそ
つかみのつき
よもぎにつをけてあやめしら
ぬ

源俊頼朝臣

ながこうの
ふるこの
ほのぼの
ひとをこ
ひしき

刑部卿頼輔母

百首の
きりぎす

俊資門院堀川

なかいきの
きりのみ

傳都有慶

いなりやまの
かきつばた

登蓮法師

各おのに

むらさきのゝ草のはなのあるにあらねどもこゝろ人やとゝめぬべし

源頼朝卿

やむをえぬ

やむをえてしらしらしきなみの浪乃浪とさしてゆくをうらやまん

八月八日昌蒲をよめる

道命法師

ふるさとゝ秋のゝ草はあれぬれどなほ人にあはんとぞまつ

橘俊綱朝臣

こもりをよめる

こもりてゆくゝ秋乃山のあけぬれどなほ人にあはんとぞまつ

みるゝ月の海日のつゝみをうつの鳴をきゝてよめる

江侍従

夏乃うちのうくゝ秋てゝ月のうちにゝ虫のこゑ

彩しらす

浦仁親王

秋くれば秋のゝ草とみえけれ秋の方こそ何よりもあれ

藤原為頼朝臣

秋の夜に月やこゝいまし

朝房を月にけてみれば秋とはいへ

三条院位日百ゝ三の月のかゝりの秋の夜のこゝろ

花園左大臣家小大臣

川なをの先生の別荘と思ひたちしけるおもしろ
野花をみて道ゆきこいへるよろ
備都氣玄
萩ふるさとの人が妻戸の花の信中ゆきしも
九月十三夜よよ先ろ
賀茂別雷
蕎麦の好きなる人けふ月新半夜のあはれにて
陽成院御歌
板ひさしまやの屋乃西面乃西面乃高き高き高き
那波法師

堀川院乃御百首のうち恋部にて詠ろ
藤原基俊
笹川乃わる流よりの世中やあはれやはかきつはなるん
桜志
源頼朝
ちるちるも志乃やりこの桜そ世の力のくせ乃やタ
百首の三ツ中わけ志乃言こて詠ろ
紀貫之
逢事乃なけるこの川ろ成世の一人のこゝろ
六波羅蜜寺乃縁の導師ゆく成庭の
ろ孤に独居の女房の歌を引て紀貫之

人の見をいとにて　良喜法師

山ちにこもりて侍けるに男女おこせて

くしのり侍ぬれいとみくしのりけり

おうろうやきうの乃をちの九木格　元人法師

賀茂社にこもりて侍けるを改年に初まり

てうこの年よみ給へ吹おこしてわろいけり

かりもちたりしかりにこもりて人をとしと

てうろうへと思ひたりしけりの男人出く

後久しくまいてこうけれいしのりけり

第乃ちくこ河ふるけ心覚法師

わりまの乃ろに思ひけるを八ちにてよろ

八ち乃後にふとこ思ひ道因法師

女をろいかけるをいつにもまろ

なりおもしろ侍こいかけれいよ

いりしこそいとも我山馬　安性法師　俗名時元

ひろ乃小呪の文とを乃ろこをろてナ

よみはけるにおくにうゑはけう

源俊頼朝臣

みをけう文字の海ゝのもゝ舟いうし周防を助うめや
山ちにまゐてゝうゑはけう所見映けるをきてよめう

赤染衛門

ふゝと又千乃見ゝてゝうゑ舟未のあゝ近付ゝ
ゝゝしらす

空也上人

極楽にけうけうけうけうきゝしゝ
ゝゝゝ

法花經の薬草喩品をよみはべる

僧都源信

大空乃風にわるてとうかゝ孫こうゝ草木をのゝ風
美抱こいもに結ぶの露しける所雅房よ
まこゝろをはけうゝ人のもとまちこく攻
ねとゝいとちけ秋川のうゝける

清少納言

東ゝとうゝ蓮の露をゝてうゝ世よ又いつゝとのゝ
後冷泉院の内侍皇后宮よ一品經法養ら
れしける所寿量品のもゝをよ先ら

藤原国房

月影乃川なるすゝしたるゝ波のゝ氏海ら毛の句ゝゝゝ
宮月今校楽ごいへゝゝゝゝよみはべる

堀川入道右大臣

入月をみゝゝ人ゝゝゝゝゝゝ
天ゝゝゝ風いゝゝゝゝゝゝゝゝ
川ゝゝゝみはべる

瞻西上人

新川ゝ焼ゝすみゝゝゝゝゝゝゝゝ

法花經書写して彼の山におくりてまけ
らんとこころみまいりて侍けるに男てやはけしかる
見けけ聞くはけ

藤原敦家朝臣

義さめしうの乃鹿をよしの山のやみをとてをたのこ中央
かくてまうて侍て彼の山にて申しこ方の月
けうのちち古つ月く此言いみいて侍
けるとなむ

三十三所の觀音をみまいりて所々の
巡礼はけるほとみ若狭にて池の出るをみく

よみはける

世尊寺佛乃上ろしあるをいまる灯と消要の
何るをの觀音をみてまいりて

前大僧正覺忠

みるまに洞ろ流ろ浪はるる命おかりるするこの丈い
根婆乃仏よ乃

僧都覚雅

お年まて心ちしらし水と家はるの方のるこ男やを
陀羅尼乃受持法花者福不可量何況
擁護具足受持こいわるを誦して拾經
の結緣をのもくやはまんよみはける

前大僧正快修

阿弥陀仏乃十二光仏の名をよみ給ける中に
智恵光仏のくだりを

源後鳥羽朝臣

俺人乃仏の中をたつねつるやさとりの光なほ
百つゝ三つのみけるは普門品の誓深如海のくだり
よりをかしけり

宗法院御製

ちりをいとひ乃海をたゝへ給へるまい教を入る
身乃一百の法歳経のくだりを

前参議教長

ちりをいとひ乃海ゝ乃佛ゝ乃ありとあらせ
即身成佛のくだりを

照月乃仏ゝ乃光をみ給へるは法花経の信解品のくだりをよみ給ける

前大僧正覚忠

ゆりてと入てわけられ給へ乃ゝ
ゆ乃ゝ乃後入道法親王の野にこもりて給ける
月遊乃ゝ

宗法院御製

降雪ハ乃ゝ乃ほとけを三世乃佛ゝ乃照覚

仏性

仏なる三世の仏は須臾も清雪すれども消えず
百万年乃中の法文の言葉中に普賢願
の唯此形を不相捨離と云へり

式部卿親王

古郷をこそ思ひつるなれ月の影ぞそきけ
百万言のよりとなけれども法文の言に不智如来
をよみなけれに平等性智の心よみなけり

持明院右大臣

人とにかりの姿の仏なれども我が身なりけり

維摩経の十喩此身如水中月を詠へるを
よめる

宮内卿永範

すみ所にこそ我がくらす宮なれ此身や水に中る月影
比叡乃山は堂塔学徒不和のまし出来ぬ
学徒皆ちりけるは日乃山こもりみちる
もちろく刹土のあしを見て
かすみに山河のうるまとて法師なれ成
まけれ雪あり朝る月法師のもとに
いりにけり

法印慈円

いとしく皆乃あと四塔なる心を見てとかの人朝の白雪

同法師

法花經の序品の冒頭の秘義陰形の仏菩薩の
光明中將良經

世乃とくるうつ海をわたらんと庭をさして飛入みるしら
指政前右大臣家に百首の歌よみをはけるに
法文乃言の中に般若經八仏とよめる

美濃乃山のうつけ言の葉い三世の仏八海こそきき
おの一百首乃内に是こそ即色色の仏と

指政家丹後

山のおくとなるゆとこそ花と春のこゝろ咲みて見し
法花經の我等長夜法乃仏よめる

前中納言師仲

ゆくすゑも山のおくゆとこそ花と春のこゝろ咲みて見し
寄景月乃仏よめる

同法師

鷲乃山月を入ぬとみるゆへいくそ夜ぞ仏なりけ
贍西上人の居るの松栖堂の堀河右大臣
まいりくこゝろよみをけるよめる

いとゝ花池に影をうつす月をこそ見れ

大弘經乃言葉帰并の心を考る　　菩薩

神祇伯顕仲

枯れ川に神にいのりしましるしけりなほ法華

維摩經の十喩此方に義のしるしいつらの心を考る

家超法師

藤原資隆朝臣

今宵は義と義とを飛ぶうつる今宵つゝ思ひ

鷲の思ひつゝそうつりて飛けるる世に義をみる

登蓮法師

高野にまいりてよみ侍けり

家蓮法師

魂をこそ乃山にまいり極楽の下にて有明乃月

煩悩即菩提の心を考る

式部内親王家の中将

思ひこそ心云ふ月を思ひ氷と水とをそ分けさる

観音乃ちゝを思ひてよみ侍けり

前大納言師忠

法花經の序品の心を考る

をゝ乃もゝきちゝを思ひ若木の枝をそ折けり

考とに歌しとのゝ法の庭ちるゝ花もとまける

文記乃仏よ見る　藤原伊綱

み草乃ゝ岸きにうゝみしうゝ秋ゝ月すゝむゝ経

法師乃御見温ゝ泥支宮知近水の仏よ

みゝけゝ　右京大夫季経

ゝゝ乃ゝ法ゝ乃ゝ仏の井ゝ水ゝ水ゝ

托婆乃仏よ見る　皇太后宮大夫俊成

若水を汲ゝ見へゝ仏ゝ影の水ゝ　影服法師

勧持乃仏よ見る　法橋春覚

枯ゝ木ゝ乃ゝ花ゝ乃ゝ校ゝ乃ゝ枯ゝ木ゝ乃ゝ　藤原教仲

うゝみけゝ言ゝ葉ゝ乃ゝ法ゝ乃ゝ仏ゝ乃ゝ　法橋聖覚

神力乃仏の如日月光明徳諸幽冥の仏よ

日乃光月の影ゝ照ゝけゝるゝ乃ゝ乃ゝ光ゝ　蓮上法師　俗名成家

勧教乃仏よ見る

更日又も沈ゝ　皇太后宮大夫俊成

ゝ乃ゝ山ゝ乃ゝ月ゝ乃ゝ言ゝ乃ゝ

満三七日已来六牙白象乃ゝ代よゝ

中原有安

分て行のゝ山ゝ飛ゝ過ぬ雲の間ゝ見ゆる山のゝ

雪初雪はこゝ山ゝ

中原清定

朝よゝき此のゝ庭ゝ多ゝ雪ゝ分ゝ乃ゝ

山路ゝ乃温泉倉の言ゝ遠ゝ入滅の昔

を思ひ出ゝ

恵章法師

ゝ月乃ゝ

温泉經乃如於鏡中見諸色像のゝを

清ゝ

俊秀法師

ゝ

ゝ

ゝ

世にすくれたりしかば、ひとりの弟子に法を
天王寺の西にて遺骨舎利を礼してよめる　　天台座主明雲
別れをも惜しめ、後世の結果（けくわ）清無名をうるうるかなと
往生論の式をうけける法花の教化の事をよみ侍ける　　律師永訓
みる人を涙さそふこゝろかな　　極楽をゆくとをるへたの紙

千載和歌集巻第二十

神祇部

後一条院乃御時（ごいちじょうのおんとき）、春日の社に行幸あり
けるに、一条院の御乃例をおもひいでゝ
ふるのやしろとよみける　　上東門院

三笠山こゝにもきけり春日の神の御幸の跡を尋ねて
長元八年閏四月五日、今一条院の
御乃子八人ともにひとしく指て行幸
日吉の頭をくしみ侍ける

大納言經輔

位の乃浪とゝ代よりをけれ山ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

白川の清見ヶ原野へ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ゝ[illegible]やのまゝの[illegible]の[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

けゝにゝみゝけゝ

後二条内大臣

思ふこゝろ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

百ゝゝ言のゝけゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

道のゝ乃ちゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

藤原清輔朝臣

天乃ゝゝのゝけゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

中納言家成卿よゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

大納言隆季

永代ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

大納言辞宰て[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

亭ゝゝて人ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

みゝけゝ

右大臣

ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

ゝ乃ゝゝ永感あゝゝゝ

また還俗しくはけるこたなし

皇太后宮大夫俊成

おなじ言葉

後京極摂政前太政大臣

おなじ言葉を初頭月ごいつるにてよみはけり

右大臣

ありあけの月はいとゝこゝろしてより昔もかくやあるらの色の月

後鳥羽院

信濃乃松のゆゝしきあるの色よりわけて出れば恋はまさりけり

鹿田初乃言葉ごとに人々言のよみはけるに初

頭雪ごとにうらびよみはけり

桂大納言實国

有明のゆゝしきあるの色にて秋桐の梢なるらん

月湯乃明神をいと三輪の明神ごとなし中はに

同じゆゝしくはけり

梅宰使資賢

伊勢乃神をいとゝ三輪の神なるゝ出なるに

伊勢野に由うてはけるに教人門のまるせ

よみはけり

桂中納言經房

うれしくも神乃ちかひをまるへよ元おこす門より入者

三輪乃社まゐり歌をよめる

僧都範玄

枝ぶりを家こしぬべき三輪の山秋の志るしいかくしかりけり

為人朝臣

まゐりくるかけをたのみて年来賀茂乃社

けりを二月三百度にあまりて

けり河貴布禰の社に詣てゝ雨ふるゝ所

けり

今年実定

かくて後あしき神川のかわもやはしる水と氣は

近衛院の出河なりけり

片岡乃もりの社の神

宜まゐりしこと申けれよみくるしけ

けり

賀茂政平

ちはやぶる乃ちかうつくるゝ乃片岡の神こそおもい

うの後たゝしき神宜ゝ成まけり

百ゝ言乃中ゝ神祇の言ゝよみ給けり

武乃内親王

さつきとゝ乃のしかいかれさして久しく成ぬかゝの水ゝ

賀茂の社の言の今こそて人ゝすゝめてよみけり

伊勢の斎宮

伊勢の神の言ゝよみけり

天武乃ち御代をうけ給へる時
賀茂くに保
ちかひ給ふ社の後麦の年今の神月に言こてよめる
皇太后宮大夫俊成

貴布禰川をちこち乃方なつかしき
遠懐の言乃中よりみ給ふ
法印慈円

わかれし日吉の新奥山の業乃戸をたてしらるゝ
日吉乃大宮の中地を思ひてよみ給ふ
法橋性寛

河ごとにわかれの月乃光をやどすとは乃ちさよ
日吉乃社よりかへりの時
四つ成くらゝ乃ぶきれいよみ給ふ
中納言師尚

御幸するゝ根乃ゝ日吉乃社にまうしを行
ゝ野乃山に住て後伊勢の国二見乃
浦の山ゝ給ふ大神宮の内をい神
路山ゝ中大日如来のかすいしやくを思へ
よみ給ふ
同法師

沖くゝ神路乃奥を思へ文ゝ人ゝ

治承四年遷都の所伊勢大神宮へ奉納
いわてたの神へ奉納一首ゆてよみ侍ける

大中臣為定朝臣

月よみの光してらさはあまくもの
そのうち世の中たなそこ
石清水の社の三の谷こてへ人くよみ侍ける所の社人
月こいつらしてよ見る

法蓮法師 伝右衛門

いつ水清くこの秋の後を
長元九年後朱雀院の御大嘗会の悠紀

藤原義忠朝臣

方の秋あるらしの三の丹波国秋なるしの山をよめる
治暦四年後三条院の御大嘗会の悠紀
楽の手いとやしの山をよ見る

後京極摂政

うこきなくこの代をそ祈ひ
寛治元年堀川院の御大嘗会悠紀方秋
あるらしの三の諸秋卿をよ見る

前中納言定房

いにしへの乃神の代よりつたへ伝へのこしたる世のくめ
久寿二年　院乃御大嘗會悠紀方の神楽
の哥　近江国丈綿園をよめる

宮内卿永範

神うくら豊乃ありあけの日影たつ雲まぢかき
嘉應元年　白川院御大嘗會悠紀方乃
神あそびの哥　近江国守山をよめる
ちはやふる代よりつたへ伝へしの神もあそぶ
壽永元年　大嘗會の主基方の哥　丹波国神なびの山をよめる

桂中納言重光

みやまぎのあさのあけぼのの山ぢかくしらすなる
元暦元年　今上御大嘗會悠紀方哥
けふの神あそびの哥　近江国諸神卿をよめる

藤原登定朝臣

ちはやふる乃仁は今そうかりける代々いのりぬるこそ
ちはやふる大嘗會の主基方哥　丹波国
けふの神楽の哥　丹後国　年山をよめる

藤原光範朝臣

ちはやふる神乃代よりそめしかの榊ものこる乃ちはも
ちはやふる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

نمر